

厚真町 イクバンドユクチセ2遺跡

— 厚幌ダム建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成26年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

厚真町
イクバンドユクチセ2遺跡

— 厚幌ダム建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成26年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター



空中写真（東から）



基本土層 R-21・22区（北から）



遺物出土状況（南西から）



土器出土状況（南東から）



調査状況（北から）



復原土器

例 言

1. 本書は、北海道胆振総合振興局 室蘭建設管理部が行う厚幌ダム建設事業に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成25(2013)年度に実施した、厚真町 イクバンドユクチセ2遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書(『厚真町 イクバンドユクチセ2遺跡』北理調報319)である。
2. 本書の執筆は、村田大・末光正卓・奥山さとみが分担し、文責は各項目の末尾に括弧で示した。編集は末光が行った。
3. 写真撮影は、現場写真は越田雅司が行い、報告書掲載遺物の撮影は第2調査部第1調査課 中山昭大が行った。
4. 調査・報告にあたり、下記の諸機関及び各氏から御指導・御協力をいただいた。(順不同・敬称略)

北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課 厚真町教育委員会
千歳市教育委員会埋蔵文化財センター 恵庭市郷土資料館 苫小牧市美術博物館
株式会社シン技術コンサル

厚真町教育委員会
乾 哲也・奈良智法・宮塚義人・宮崎美奈子・服部一雄・松井 昭・山戸大知・岩橋由久・荻野幸男
株式会社シン技術コンサル
清水昌樹・長谷川徹・工藤 肇・惣田 稔

記号等の説明

1. 確認した遺構は下記の略号を用い、連番を付し本文及び図表中に用いた。

P：土坑　　TP：Tピット

2. 遺構図面等の縮尺

土坑・Tピット：40分の1　　地形測量図・遺構位置図：任意

各図にスケールと方位記号（座標北）を付した。

なお、遺構平面図の「+（十字）と記号」はグリッド名で、遺構平面図等の「・（ドット）と数値」は、その地点の標高（m）を表す。

3. 遺物図の縮尺は次のとおりでスケールを付した。

復原土器：4分の1　　拓本土器：3分の1

剥片石器：2分の1　　礫石器：3分の1（大型のものは4分の1）　　石製品：2分の1

4. 本文及び図表中で遺構の規模は次の要領で示した。一部破壊されているものは現存する計測値を（丸括弧）で示した。

土坑・Tピット：確認面の長径×短径/床面・坑底面の長径×短径/確認面からの最大深（m）

目次

カラー図版	
例言	
記号等の説明	
目次	
図目次	
表目次	
写真図版目次	

I章 緒言

1. 調査要項	1
2. 調査体制	1
3. 調査の経緯	1
(1) 厚幌ダム建設事業埋蔵文化財発掘調査	
(2) イクバンドユクチセ2遺跡の調査	
4. 調査結果の概要	5

II章 遺跡の立地と周辺の環境

1. 立地と環境	7
2. 地名	9
3. 遺跡周辺の地形・現況	10
4. 周辺の遺跡	11

III章 調査の概要

1. 発掘区の設定	19
2. 基本土層	21
3. 調査の方法	23
4. 整理の方法	23
(1) 一次整理の方法	
(2) 二次整理の方法	
5. 遺物の分類基準	23

IV章 遺構

1. 概要	29
2. 土坑	29
P-1・P-2	

3. Tビット	33
TP-1・TP-2・TP-3・TP-4・TP-5・TP-6・TP-7・TP-8・	
TP-9・TP-10・TP-11	

V章 遺構・包含層出土の遺物

1. 概要	45
2. 土器	45
(1) 復原土器	
(2) 破片土器	
3. 石器等	55
(1) 剥片石器	
(2) 礫石器	
(3) 石製品	

VI章 まとめ

1. 概要	69
2. 土器	69
3. 石器等	69
4. 地名「イクバンドユクチセ」について	71

写真図版

引用参考文献

報告書抄録

目 次

図1 遺跡位置図(1)	3	図20 包含層遺物出土分布図(6)	53
図2 遺跡位置図(2)	4	図21 包含層出土 復原土器	54
図3 遺跡周辺の地形	8	図22 遺構・包含層出土 破片土器	56
図4 周辺の遺跡	12	図23 包含層出土 破片土器(1)	57
図5 グリッド設定図	20	図24 包含層出土 破片土器(2)	58
図6 基本土層図 (R-21・22区(TP-10付近))	22	図25 遺構・包含層出土 剥片石器	59
図7 遺構位置図・Ⅶ層上面地形測量図	30	図26 遺構・包含層出土 礫石器(1)	60
図8 P-1・P-2	31	図27 遺構・包含層出土 礫石器(2)	62
図9 TP-1・TP-2	32	図28 遺構・包含層出土 礫石器(3)・石製品	63
図10 TP-3・TP-4	34	図29 厚真川上流域	70
図11 TP-5・TP-6	35	図30 「累標」(夕張岳第十六號)	72
図12 TP-7・TP-10	36	図31 「穂別」(夕張岳十六號)	72
図13 TP-8・TP-9	38	図32 「厚真村全圖」	74
図14 TP-11	40	図33 「厚真村に存在する遺跡」	74
図15 包含層遺物出土分布図(1)	48	図34 厚真町地名図(昭和51年)	76
図16 包含層遺物出土分布図(2)	49	図35 『厚真の旧地名を尋ねて』(昭和51年)	76
図17 包含層遺物出土分布図(3)	50	図36 厚真町地名図(昭和53年)	76
図18 包含層遺物出土分布図(4)	51	図37 『統厚真の旧地名を尋ねて』(昭和53年)	76
図19 包含層遺物出土分布図(5)	52		

表 目 次

表1 遺構数一覧表	5	表16 遺構出土礫石器・石製品・レキ点数表	43
表2 遺物点数一覧表	5	表17 包含層出土土器点数表	46
表3 周辺の遺跡一覧表	16・17	表18 包含層出土剥片石器点数表	47
表4 測量基準杭一覧表	19	表19 包含層出土礫石器・ 石製品・レキ点数表	47
表5 基本土層観察表	22	表20 L-14区出土復原土器観察表	64
表6 土器時期分類基準	24	表21 N-15区出土復原土器観察表	64
表7 土器部位分類基準	24	表22 R-22区出土復原土器観察表	64
表8 土器残存状態分類基準	24	表23 M-14区出土復原土器観察表	65
表9 石器等器種分類基準	25	表24 N-16区出土復原土器観察表	65
表10 石器等残存状態分類基準	25	表25 遺構・包含層出土 破片土器観察表	66・67
表11 岩石分類体系表	26	表26 遺構・包含層出土 石器等観察表	68
表12 岩石(石材)の略号	27	表27 イクバンドユクチセ沢名称対照表	78
表13 遺構規模一覧表	41		
表14 遺構出土土器点数表	42		
表15 遺構出土剥片石器点数表	42		

写真図版目次

カラー図版

カラー図版1

- 空中写真（東から）
- 基本土層 R-21・22区（北から）
- 遺物出土状況（南西から）
- 土器出土状況（南東から）

カラー図版2

- 調査状況（北から）
- 復原土器

写真図版

図版1 調査前の状況（東から）

- 調査状況（北東から）

図版2 調査完了状況1（北西から）

- 調査完了状況2（北東から）

P-1 土層断面（北から）

P-1 完掘状況（北から）

P-2 土層断面（北から）

P-2 完掘状況（北西から）

図版3 T P-1 土層断面（東から）

T P-2 土層断面（南西から）

T P-2 完掘状況（南西から）

T P-2 礫出土状況（南西から）

T P-3 確認状況（北西から）

T P-3 土層断面（北西から）

図版4 T P-4 土層断面（南から）

T P-3 完掘状況（北から）

T P-4 杭穴確認状況（東から）

T P-5 土層断面（北から）

T P-4 完掘状況（北から）

図版5 T P-6 土層断面（南から）

T P-5 完掘状況（北から）

T P-6 完掘状況（南西から）

T P-7 土層断面（南から）

T P-7 完掘状況（北から）

図版6 T P-8 土層断面（南東から）

T P-8 完掘状況（東から）

T P-9 土層断面（東から）

T P-9 完掘状況（東から）

図版7 T P-10 土層断面（北から）

T P-10 完掘状況（北から）

T P-11 土層断面（北から）

T P-11 完掘状況（北から）

図版8 包含層出土復原土器・遺構出土破片土器

図版9 遺構・包含層出土破片土器

図版10 包含層出土破片土器（1）

図版11 包含層出土破片土器（2）

遺構・包含層出土剥片石器

図版12 遺構・包含層出土礫石器・石製品

I章 緒 言

1. 調査要項

遺 跡 名：イクバンドクエチセ2遺跡（J-13-119）

事 業 名：厚幌ダム建設事業埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道胆振総合振興局 室蘭建設管理部

所 在 地：勇払郡厚真町字幌内61-31ほか

調査面積：1,174㎡

調査期間：平成25年4月1日～平成27年3月31日（現地調査 平成25年8月21日～10月31日）

2. 調査体制

平成25年度

第1調査部長 千葉英一（常務理事 兼務）

第2調査部長 三浦正人

第2調査部第3調査課長 村田 大（発掘担当者）

主 査 越田雅司（発掘担当者）

平成26年度（整理作業）

第1調査部長 千葉英一（常務理事 兼務）

第2調査部長 三浦正人

第2調査部第3調査課長 村田 大

主 査 末光正卓

嘱 託 奥山さとみ

3. 調査の経緯

（1）厚幌ダム建設事業埋蔵文化財発掘調査

厚真川総合開発事業の一つである、厚幌ダム建設事業は治水（洪水調節）、流水の正常な機能の維持（河川環境の保全）、水道用水と灌漑用水の確保のための多目的ダムを、勇払郡厚真町を流れる二級河川厚真川に建設するもので、北海道胆振総合振興局 室蘭建設管理部 厚幌ダム建設事務所により行われている。昭和52(1977)年に予備調査、昭和61(1986)年には調査が着手され、平成7(1995)年に「厚真川総合開発事業 厚幌ダム建設工事に関する基本協定」が北海道と厚真町の間で結ばれた(図1・2)。

建設工事の具体化に伴い、平成12(2000)年7月6日、北海道室蘭土木現業所（当時）厚幌ダム建設事務所（以下、ダム事務所）から、北海道教育委員会（以下、道教委）に埋蔵文化財保護のための事前協議書が提出された。協議区域はダムの湛水地域（洪水時最高水位 標高88.1m以下）と現道の切り替え部分等を合わせた範囲である。

平成13(2001)年6月に、道教委によりダム堤体下部で道道切り替え工事に伴う試掘調査が行われ、厚幌1遺跡が発見され、同年10月には所在確認調査の結果、協議区域すべてについて試掘調査が必要と回答された。以後、道教委による所在確認調査、試掘調査が継続的に行われ、平成25(2013)年12月現在、発掘調査が必要な遺跡は24か所を数え、面積（遺構確認調査範囲を含む）は約20万㎡である。平成13(2001)年、道教委と厚真町教育委員会（以下、町教委）の協議では、当初、発掘調査は町教委で行うことが決められ、平成14(2002)年、町教委により厚幌1遺跡の発掘調査が開始された。以後、平成26(2014)年度まで町教委により発掘調査された遺跡（登録番号）は、厚幌1遺跡(25)・ヲチャラ

セナイチャシ跡(100)・ヲチャラセナイ遺跡(101)・上幌内モイ遺跡(79)・上幌内2遺跡(91)・シヨロマ1遺跡(81)・シヨロマ2遺跡(92)・シヨロマ3遺跡(121)、一里沢遺跡(80)・オニキシベ2遺跡(77)・オニキシベ4遺跡(89)・オニキシベ5遺跡(90)・オニキシベ6遺跡(118)である。

ダム建設事業が進捗するに伴い、平成24(2012)年度から、当センターも発掘調査を担当しており、上幌内3遺跡(123)・上幌内4遺跡(124)・上幌内5遺跡(125)・シヨロマ4遺跡(122)・オニキシベ1遺跡(14)・オニキシベ3遺跡(78)・イクバンドユクチセ2遺跡(119)・イクバンドユクチセ3遺跡(120)を調査した。

(2) イクバンドユクチセ2遺跡の調査

イクバンドユクチセ2遺跡は、当初、道教委の所在確認調査で見えられ掲載されていたが、試掘調査は行われていなかった。ダム建設により、湛水地域となる谷の底の厚真川沿いを走る、現在の道道235号上幌内早来停車場線は、南東側の山間部を通る新しい路線に切り替えられる。この道路の「1号橋」は本遺跡の対岸にある無名の沢にかかるが、この橋の上流部分の道路の建設予定位置は、現在の厚真川の流れと重なる。そこで、山間部の道道の新路線を建設する前に、この厚真川の流れを切り替える工事が必要となった。

道教委は平成24(2012)年7月18日に、イクバンドユクチセ2遺跡7,898㎡を試掘調査し、道路の法面にはTピットがみられ、遺物も出土したため、発掘調査が必要と判断した。その後、ダム事務所から詳細な工事図面の提供を受け、これに、厚幌ダムの常時満水位である標高85.4m以上は発掘調査の対象外とし、本遺跡の調査面積1,610㎡が図面上で示された。

河川切り替工事は、厚真川にかかる「祭橋」から「田舎橋」の下流部へ約250mの地点(合わせて、イクバンドユクチセ3遺跡の東側の崖を攻撃する屈曲部を解消し直線化する)までの区間を、現道道上に造った新流路に導き、この区間の道道は、南東側に建設する道路に付け替えるもので、工事予定は平成25(2013)年9月着手であった。

当センターは、平成25(2013)年2月、調査範囲を確定するために、図面上の境界と常時満水位である標高85.4m等高線の形状を測量した(委託)。

発掘調査は平成25(2013)年5月からの着手を予定していたが、年度当初に予算を確保できず、調査の準備工の開始は7月12日となり、発掘調査の着手は8月21日となった。重機による表土除去作業中、西側部分は南面する急崖で、東側は畑への進入路で削平されており、包含層が残存していない範囲が判明し、これらは道教委から発掘調査は不要との指示を受け、最終的な調査面積は1,174㎡で確定した。発掘調査は、近くのイクバンドユクチセ3遺跡も同時に行い、10月31日に完了した。河川と道路の切り替え工事は9月24日に始まったが、発掘調査に影響する部分の工事は、調査完了後の10月末から着工された。

工事完了後、イクバンドユクチセ2遺跡の南側部分は、厚真川の新しい流路の境界付近になった。さらに、この河川を渡る橋はなく、現在、イクバンドユクチセ2・3遺跡がある対岸(右岸)に行くことはできない。

なお、整理作業は、平成25(2013)年11月から開始し、平成26(2014)年度に調査報告書を刊行することとなった。

(村田 大)

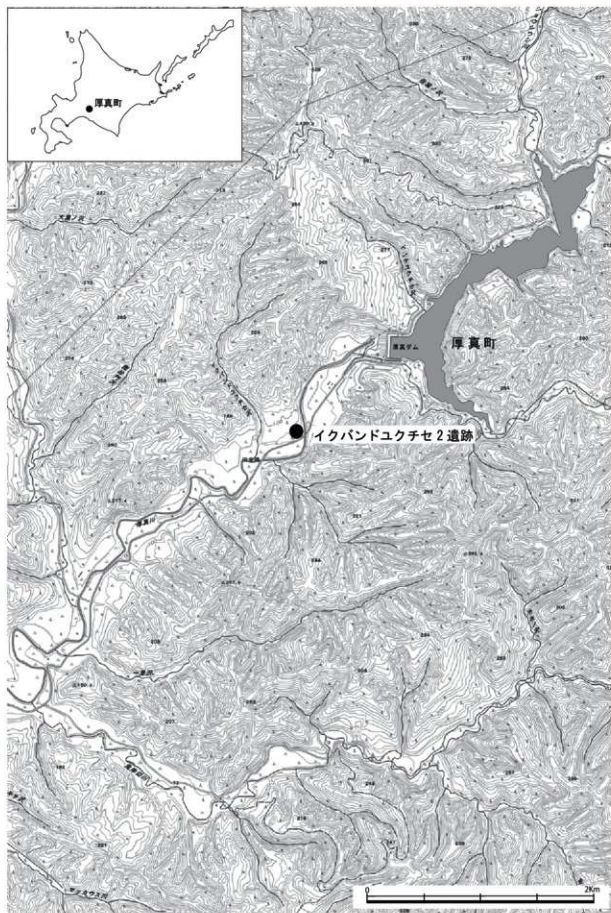


図1 遺跡位置図(1)

国土地理院電子地形図25000「厚真川上流」を縮小し加筆作成

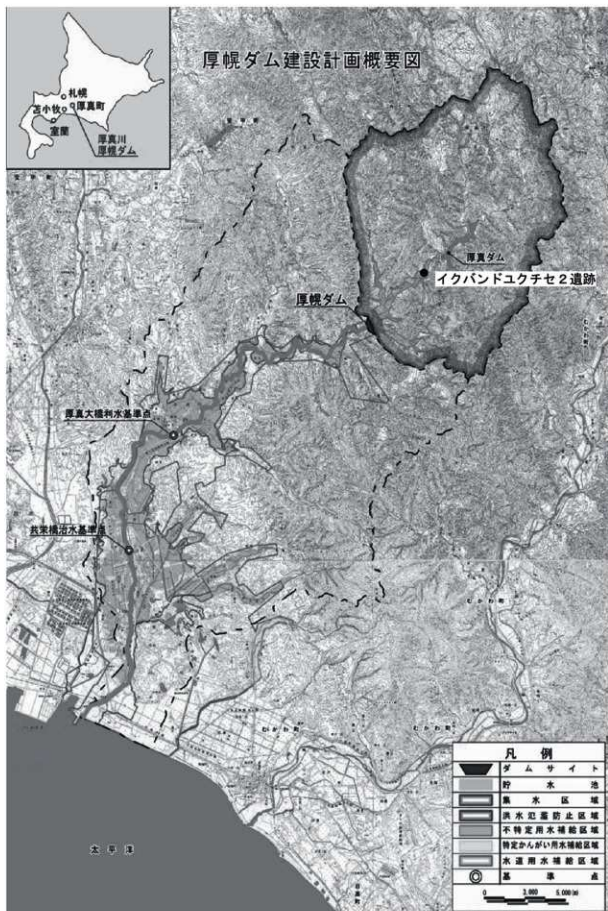


図2 遺跡位置図(2)

北海道振興総合振興局ホームページ「厚幌ダム位置図」に加筆作成

4. 調査結果の概要

確認された遺構は、土坑2基、Tピット11基である(表1)。土坑は楕円形と不整形があり、前者はTピットの可能性がある。Tピットは楕円形が9基で、このうち6基は坑底で杭穴がみられた。溝状のもの2基は長軸方向で切り合っていた。

遺物は、土器は1,971点出土した。縄文時代中期・後期のものが多く、縄文時代早期・晩期・擦文文化期のものも少量みられる。石器等は3,981点出土した(表2)。定型的な石器では、剥片石器は、石鏃、石槍・ナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパーがあり、礫石器では、磨製石斧、たたき石、すり石、北海道式石冠、砥石、台石・石皿、石製品は玉がある。また、礫石器に認定したいが、人為的に使用されたと考えられる、U・Rレキ(加工・使用痕のある礫)やレキ(自然礫)が最も多く出土した。これらの岩石は、遺跡周辺に多くみられる脆弱な堆積岩が多く、被熱しているものもみられた。

(末光正卓)

表1 遺構数一覧表

種別	記号	数 (基)	備考
土坑	P	2	P-1・2
Tピット	TP	11	TP-1~11

表2 遺物点数一覧表

出土地点 / 遺物種別	土器	石器等	レキ 現場観察	合計	備考
遺構	52	68	28	120	「レキ 現場観察」は、 一次整理完了後 現地で観察・計測・撮影し 記録資料に置き換えたもの
包含層	1,919	2,943	942	4,862	
合計	1,971	3,011	970	4,982	

II章 遺跡の立地と周辺の環境

1. 立地と環境

イクバンドユクチセ2遺跡は厚真町市街地から北東約14km、夕張山地の南西部分(勇払山地とも呼ばれる)、この山間部を流れる厚真川の右岸、標高80~85mの段丘に位置する。包蔵地として登載された遺跡では、最も上流に位置する遺跡である。遺跡の西側にはイクバンドユクチセ沢が流れ、この沢名が遺跡名の由来である(図1・図29)。

勇払山地は標高200~300mの急峻な山が多く、頂や山稜、急斜面や崖がみられ、これらを開析するV字谷や急な沢が多い。本遺跡近くの最高標高の山は、北方向に約3kmに標高435.8mの山(三等三角点「行千世奥」)、南東方向約2kmに標高393.9mの山(三等三角点「一里沢奥」)がある。

「行千世奥」の頂部から北方向に標高428mの地点があり、さほどの高低差のない山の稜線が北へ続く。その裾には、南東から東方向にベンケユクチセ沢や佐富ノ沢等の複数の沢の源流部がある。イクバンドユクチセ沢もその一つで、「行千世奥」から南南東方向へ比較的緩やかに続く尾根の西側の中腹、標高180mと160m付近の2か所に源流部があり、標高150m付近で合流し、曲線的に南西から南方向へと流れを変え、標高100m付近で山間部を出て山裾の緩斜面から平坦地を流れ、厚真川へ田舎橋の下流部で合流する。「イクバンドユクチセ沢」の名称はVI章4節で考察する。ベンケユクチセ沢の右岸の斜面は傾斜が緩く(等高線の間隔が広い)、このような地形は、厚真川上流地域ではさほど多くはないが、何か所かみられる。これは、山体を作る岩石が軟質なため崩れやすい等の要因で、山から崩落した岩石が斜面堆積物となり、周囲と比べて緩やかな斜面を形成していると考えられる。佐富ノ沢は東流し、ショウシウシ川と合流し厚真ダムに注いでいる。また、西から北西側には、毘沙門沢、大黒ノ沢がありすべてショロマ川へ流れ、ショロマ川は本遺跡の下流方向へ約2.7kmの地点で厚真川に合流し、近くに「ショロマの滝」がある。

「一里沢奥」の山裾にも複数の沢がみられ、北~北東側にはメルクンナイ沢の支流、南東から南側は、鬼岸辺川の支流である冷水ノ沢や無名の沢があり、西側へは一里沢の屈曲が少ない流れがみられ、すべて厚真川へ流れている。

本流の厚真川は、夕張山地南部に源流部を有し厚真ダムを経て、厚真町内を通り太平洋に注ぐ流路延長52.3kmの二級河川である。厚真川の両岸には、河川近くで低位の平坦地、山の裾部(標高100m以下)には緩斜面が多くみられる。これらは厚真川の河岸段丘面で、その上位に山体からの崩落物が堆積する。さらに、河川による運搬物や樽前山の火山噴出物等が堆積し現地形を形成し、厚真川上流域の遺跡の多くはこのような地形に立地している。また、特に水量が豊富な沢や大きな支流と厚真川との合流点には、これらが運搬した水成堆積物による小規模な扇状地がみられる。

勇払山地の山体を構成する岩石は、砂岩・凝灰岩等の軟質な堆積岩が主で、この地域の遺跡からは、これらの岩石を用いた礫石器や礫が多数出土する。

本遺跡から約1km上流には「厚真ダム」がある。厚真ダムは、厚真町の要望を受け、北海道庁により昭和23(1948)年に計画が立てられ、昭和28(1953)年には「国営総合かんがい排水事業」となった。同年度には現在の場所が選定され、当初は「上幌内ダム」と呼ばれた。昭和40(1965)年に定礎式が行われ、北海道開発局が建設に着手し、昭和45(1970)年に竣工した。厚真町内の水田への灌漑用水の供給を目的としたダムで、厚真川とメルクンナイ沢をせき止め、これらの合流点の下流部に堤体が造ら



図3 遺跡周辺の地形

「平成24年度 厩橋ダム建設工事 現況平面図」を縮小して加筆

れた「ロックフィルダム（中心遮水ゾーン型フィルダム）」と呼ばれる型式で、堤体の規模は、堤高38.2m、堤頂長222.0mで、貯水部分は有効貯水容量9,523,000m³、総貯水容量10,080,000m³、常時満水位は標高124.7mである（厚真村 1956・厚真町 1986・現地看板等調べ）。貯水池の右岸は、西側からベンケユクチセ沢等の複数の沢、北側からはショウシウシ川が佐富ノ沢と合流して注ぎ、北東側からは本流の厚真川、左岸の南東側では無名の複数の沢が流れ込んでいる。現在、下流に建設中の多目的ダム「厚真ダム」の完成後も、厚真ダムは使用される。

厚真ダムから厚真市街方面へは、厚真川沿いを走る「道道235号上幌内早来停車場線」がつなぎ、ダム貯水池の北東方向へは「炭鉱厚真川林道」が、厚真川沿いの山間部へと続いている。南東側の「メルクンナイ（カルクンナイ）林道」は、むかわ町穂別方面にのびているが、現在「道道933号北進平取線」の新路線が建設中であり、数年のうちに開通の予定である。

ダム貯水池の上流部には、北海道指定の自然景観保護区「厚真町いこいの森地区 未来の森」と鳥獣保護区があり、堤体の南西側には「ダム広場」・「厚真ダムキャンプ場」がある。ここは昭和48(1973)年から開催されている「田舎まつり」の会場であったが、最近厚真市街の表町公園で開かれている。現在、キャンプ場は閉鎖されており、木造の建物やステージ、石碑等が残る。石碑は田舎まつり記念で、「盛時の里」（揮毫：北島三郎、平成8(1996)年9月27日建立）とある。道路向かいの斜面中腹には小道があり、その先に「水天宮」を奉った祠がある。（厚真町 1986・現地調べ）

ダム広場とキャンプ場は、大正6(1917)年に開校した「上幌内小学校」と、昭和26(1951)年に併設された「上幌内中学校」の跡地である。これは「旧 上幌内小中学校（初代）」で、地番は字幌内293・300番地ほか（平成12(2000)年「厚真ダム現況平面図」の記載）、または幌内203番地（厚真町 1986）である。『厚真町史』によると、厚真ダム建設のため、昭和35(1960)年に幌内93番地（の2）に校舎を新築移転したとあり、中学校も翌年に新校舎に移転したとある。この場所は厚真町教育委員会が発掘調査を担当している「ショロマ1遺跡」（字幌内93番地1）で、これらは「新 上幌内小中学校（二代目）」である。昭和47(1972)年には、児童数減少のため幌内小学校と楡山中学校（現在はともに閉校）に統合され、その後、新校舎は「上幌内郷土館分館」として利用され、旧校舎は厚真ダムキャンプ場の施設として利用された。

2. 地名

イクバンドユクチセ2遺跡がある場所の現地名は、字「幌内」である。字幌内は厚真町内の北東部分に広く、東はむかわ町、北は夕張市との行政区まで、西は高丘地区、南西は富里地区、南は宇降地区と接する。幌内はアイヌ語の「ボロナイ」に由来し、江戸時代に松浦武四郎が記した『戊午 東部安都麻志 全』（松浦・秋葉 1985）に「ボロナイ 右の方の小川。此辺に来るや川岸崩平多し」とある。この小川は現在の日高幌内川のごとで、これが厚真川に注ぐ付近から下流部にかけて、シュルク沢川、オッコク沢川等の大きな河川も合流し、これらの周囲には広い低位な平地がある。アイヌ語地名「ボロナイ」の直訳は「大きい沢（川）」で、厚真川に複数の大きな川が流れ込む地点を示す意味もあったと考えられる。

本遺跡がある厚真川上流地域の、かつての字名は「上幌内（上ボロナイ）」で、昭和32(1957)年、前段で述べた広範囲の地域を統合し「幌内」となった。字上幌内は、大正8(1919)年測量の五万分一地形図「穂別」（夕張嶽十六號）(図31)にみられ、厚真川沿いに「小徑（道幅一米未満）」（破線表記）がある。下流部からみていくと小道は川の左岸で、河川が南北方向に曲がる付近で、道は右岸に渡る。そこから山裾部の広い緩斜面部を通り、イクバンドユクチセ沢と本遺跡を過ぎ、現在の「祭橋」付近

で再び左岸に出る。少し行くと道と厚真川の間学校（旧 上幌内小学校）がある。少し上るとまた厚真川の右岸に渡り、この道は、厚真ダムの北側にある放水路と概ね同じ位置である。

現在、厚真ダムの堤体がある部分は、両側から山の裾野が張り出す狭い谷であり、北東方向からの厚真川と南方向からのメルクナイ沢の流れが堰き止められている。厚真ダムの貯水池部分は、かつて広い平坦地で、数軒の家がまばらにみられ、川沿いに小道が続き、川を渡る場所は5か所ある。さらに上流にいくと、兩岸の平坦部がなくなり、集落はこの付近までである。この平地には、北側からのショウシウシ川と、北東側からの厚真川が合流する地点がある。

かつての字上幌内の範囲は、厚真川と鬼岸辺川の合流点付近から、厚真ダムのさらに上流部までと考えられ、現在は、道道上幌内早来停車場線や、上幌内モイ遺跡、上幌内1～5遺跡といった名称にその名をとどめている。

3. 遺跡周辺の地形・現況

イクバンドユクチセ2遺跡の周辺（図3）は、厚真川右岸である北側の山は、比較的緩やかな斜面であるのに対し、左岸の南側は急峻な傾斜や崖である。北方向から流れる厚真川は、南側にある岩石の崖にぶつかり西へ大きく流路が曲がり、その内側の平坦部を望む台地の斜面先端にイクバンドユクチセ2遺跡は立地する。名称のイクバンドユクチセ沢は、本遺跡から西方向へ約300m離れた地点で南流し、田舎橋の下流で厚真川と合流する。本遺跡はイクバンドユクチセ沢よりも厚真川の高位の段丘面に位置するといえる。イクバンドユクチセ2遺跡の北側は山林で、見下ろす東から南にかけての平坦地は農地であった。調査区の西側部分では沢地形がみられ、二つの湧水部から合流し厚真川に注いでいたと思われる。

調査区のすぐ南側は、道道235号上幌内早来停車場線が走り、上流部の「祭橋」、下流部の「田舎橋」で厚真川を越える。これらの橋の名称は、昭和期に厚真ダム広場で開催されてきた「田舎まつり」から命名されたと思われる、祭橋は昭和49（1974）年、田舎橋は昭和48（1973）年に鋼橋（永久橋）に架け替えられた。田舎橋の上流には、人が利用するための「吊橋」があり、昭和49（1974）年に架けられたものである（厚真町幌内自治会 1997）。また、本遺跡から西方向にある平坦な台地上には、同時に当センターで発掘調査したイクバンドユクチセ3遺跡があり、そのさらに西側には無名の沢が南流し、斜面の裾に「祠」がある。現地は確認できなかったが、「平成24年度 厚幌ダム建設工事資料整理 現況平面図 15号」（図3）では、祠のある場所は平坦に整地され小道もみられる。これは位置から『幌内のあゆみ』（前掲書）に記載のある「山の神」、すなわち、山や木に対する信仰である「マサカリ立て」に関するものである。入植者が山林の開拓時に、老木や大木にしめ縄をし、酒・食べ物、道具をお供えて、作業の安全祈願を行ったと伝えられる。明治時代の年月日が記された工具、昭和7（1932）年に幌内地区の居住者による手製の鎌が祀られていたとあり、これらの奉納品は、昭和39（1964）年に幌内神社に合祀された。

平成25（2013）年10月の発掘調査完了後、厚真川を切り替える工事が行われ、田舎橋と祭橋の下は水の流れが無くなった。現在、厚真ダムから幌内地区の幌内橋まで、道道235号上幌内早来停車場線は、山間部の谷底を流れる厚真川の左岸を走るが、厚幌ダムの完成により湛水地域となる部分は、南側の山間部を通る新路線に切り替えられる。新道路は長さ5,660mで、直線部とゆるやかな曲線の線形で、2か所のトンネルと7か所の橋がある（番号は上流部から昇順）。平成26（2014）年5月には、下流部から厚幌トンネル（2号トンネル）・オニキシベ橋（7号橋）、龍神の森トンネル（1号トンネル）、一里沢橋（6号橋）までの区間が付け替わった。

（末光）

4. 周辺の遺跡

厚真川の上流部地域は、厚幌ダム建設事業に伴う発掘調査で、多くの遺跡が確認・調査されている。具体的には、上流の厚真ダム付近から下流は厚幌ダム堤体建設予定地付近までの範囲で、ここに位置する遺跡の概要を、厚真川の本流と支流を含め、下流から上流部の順に記述する。

・厚真川左岸 キウキチ沢左岸

厚幌1遺跡 (25)

本遺跡は、平成14・15・24(2002・2003・2012)年度に、厚幌ダム建設事業に伴う発掘調査が、平成20・25(2008・2013)年度には、勇払東部(二期)地区厚幌導水路建設に伴う発掘調査が行われた。うち平成25(2013)年度のみ当センターが担当し、これ以外を厚真町教育委員会が実施した。これまでの調査では、アイヌ文化期の送り場と考えられるシカの頭蓋骨の集中がみつきり、爪形文が施された縄文時代晩期の土器や、胎土に滑石を多く含む縄文時代前期の土器も多数出土した。

・厚真川左岸 キウキチ沢右岸

厚幌2遺跡 (88)

主な時代は縄文時代前期で、試掘調査では土器・礫石器・チップが出土した。今後、勇払東部(二期)地区厚幌導水路建設に伴う発掘調査が予定されている。

・厚真川左岸 鬼岸辺川との合流点から下流部

オニキシベ4遺跡 (89)

擦文文化期の複数の痕跡をもつ平地住居跡が調査され、アイヌ文化期の「チセ」への移行を考える上で重要な調査例である。また、縄文時代中期の「厚真1式土器」(苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1998)の復元土器が報告されている。

オニキシベ6遺跡 (118)

この地域では発見例の少ない、縄文時代後期の堂林式土器が多数出土した。

・厚真川右岸 ワチャラセナイ川との合流点付近

ワチャラセナイチャシ跡 (100)

ワチャラセナイ遺跡の範囲にあり、段丘の先端部に造られた「丘先式」のチャシ跡である。一条の溝で区画され、形状の違いから二つの時期が認められる。チャシ跡の溝の内部(内郭)で、建物跡が確認された。

ワチャラセナイ遺跡 (101)

本遺跡は、立地から交通路上重要な遺跡であり、各時代の遺構・遺物が確認された。アイヌ文化期の平地住居跡や土坑墓が調査され、シカやヒグマの骨が確認された。擦文文化期では土坑・焼土が調査され、土器は、刻文や貼付圍繞帯をもつ後半期のものである。縄文時代は前期が主で、土坑墓が複数みつきり、大型の堅穴住居跡も調査された。また、多量の両面調整石器が出土した剥片石器集中もある。

・厚真川左岸 鬼岸辺川との合流点付近

オニキシベ2遺跡 (77)

各時期の遺物が出土している。アイヌ文化期の土坑墓、擦文文化期のカマドを伴う堅穴住居跡が調査された。また、統縄文時代の遺構・遺物が多く、統縄文時代の後北B・C1式土器の復元個体が多数報告されている。

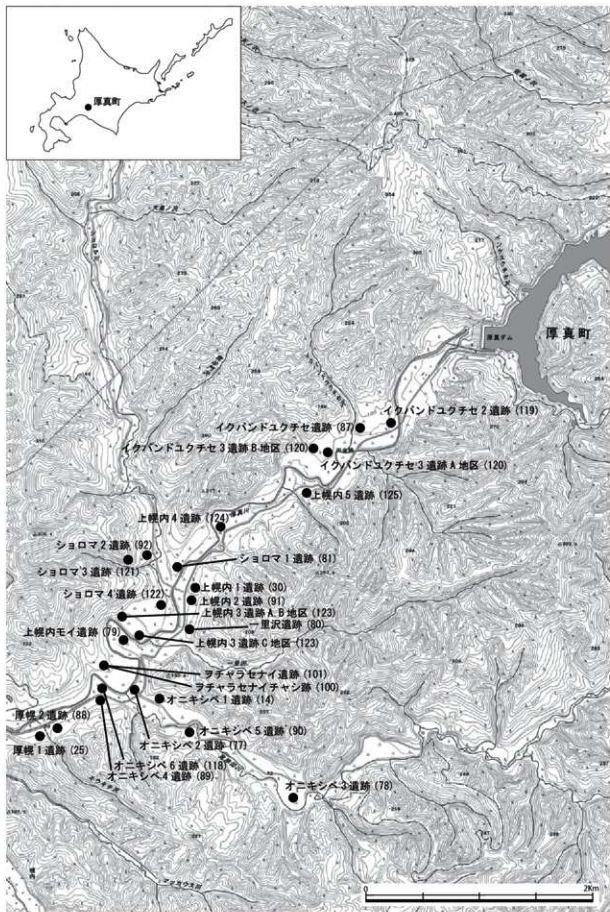


図4 周辺の遺跡

国土地理院電子地形図25000「厚真川上流」を縮小し加筆作成

- ・鬼岸辺川 右岸

- オニキシベ1遺跡 (14) (北埋調報318)

- 平成24・25 (2012・2013) 年度に当センターが調査した。縄文時代中期・後期が主たる時期で、堅穴住居跡の炉跡は、中期は地床が、後期は石組炉である。

- ・鬼岸辺川左岸

- オニキシベ5遺跡 (90)

- 縄文時代後期の北筒Ⅲ式土器が出土し、道東地方との関係性が想定される。また、大型の石棒も出土した。

- ・鬼岸辺川右岸

- オニキシベ3遺跡 (78)

- 平成26 (2014) 年度から、当センターが担当している。縄文時代後期の堅穴住居跡は、平面が楕円形を呈し、地床炉か石組炉のいずれかを伴う。これらは、黒色土層上面では、明瞭なくぼみで見られた。さらに、掘り上げ土を伴う大型のものも確認した。次年度以降も調査予定である。また、試掘調査では、開拓期頃の鉄鍋や蹄鉄、ガラス瓶などが出土したとある (厚真町教育委員会 2014)。

- ・厚真川左岸 平坦な低地

- 上幌内モイ遺跡 (79)

- 各時代の遺構・遺物が見つかった。アイヌ文化期は平地住居跡や土坑墓が調査され、骨の集中からはヒグマの骨が見つかった。擦文文化期では、類例の少ない土坑墓も発見され、副葬品の擦文土器の施文に用いられた櫛歯状工具から、オホーツク式土器の影響が推測されている。羽口や鉄滓などが多く出土した遺物集中は、鉄器生産に関するものと考えられる。続縄文時代では、アヨロ2b類の土器を伴う遺構が調査された。縄文時代は、早期・中期・後期の堅穴住居跡と160基を超えるTピットが確認された。後期旧石器時代の札滑型細石刃核を伴う石器群が出土し、これに関連する焼土、炭化物集中も確認された。旧石器が出土したきっかけは、Tピットの杭穴の調査中に後期旧石器の遺物が出土したとある。このことは調査の際に十分に留意されねばならない。

- ・厚真川右岸

- 上幌内3遺跡 (123) は三つの地区があり、当センターが調査を担当した。C地区は離れており、A・B地区の間には小さな沢地形がある。平成25・26 (2013・2014) 年度にC地区、平成26 (2014) 年度にA・B地区を調査した。

- 上幌内3遺跡C地区

- 擦文文化期～アイヌ文化期の平地住居跡・建物跡を調査し、縄文時代後期の大型堅穴住居跡もみつけた。

- ・無名の沢右岸

- 上幌内3遺跡A地区

- アイヌ文化期の土坑墓が2基みつけた。副葬品は、鉄鍋・漆製品・ガラス玉・古銭などが出土した。また、杭そのものが残る縄文時代のTピットも確認した。

- ・無名の沢左岸

- 上幌内3遺跡B地区

- アイヌ文化期の平地住居跡を調査し、擦文文化期の遺物集中から須恵器が出土した。また、縄文時代では早期の堅穴住居跡が見つかった。

・厚真川左岸 一里沢右岸

一里沢遺跡 (80)

Tピットが重複することなく、狭い範囲に集中してみられ、新旧関係が掘り上げ土と覆土から判明できる可能性があるとの報告がある。

・シヨロマ川右岸 厚真川との合流点付近

シヨロマ4遺跡 (122)

平成26 (2014) 年度に当センターが調査を行った。擦文文化期～アイヌ文化期、縄文時代の遺構・遺物がシヨロマ川に面する崖際に多く確認された。擦文文化期の土坑墓がみつき、縄文時代後期の石組炉を伴う大型の竪穴住居跡も調査した。

・シヨロマ川右岸 無名の沢右岸

シヨロマ3遺跡 (121)

擦文文化期の鉄器集中と、縄文時代の三体が合葬された土坑墓が発見され、縄文時代後期の大型竪穴住居跡もみつかった。

・シヨロマ川右岸 無名の沢左岸

シヨロマ2遺跡 (92)

縄文時代中期の竪穴住居跡が調査され、多数のTピットが列状でみつかった。

・シヨロマ川左岸 厚真川右岸

シヨロマ1遺跡 (81)

厚真川とシヨロマ川に挟まれた合流点付近に立地する。アイヌ文化期の平地住居跡が確認され、縄文時代後期の石組炉をもつ竪穴住居跡と、縄文時代前期の大型竪穴住居跡が調査された。

・厚真川左岸 無名の沢左岸

上幌内2遺跡 (91)

アイヌ文化期の土坑墓がみつき、副葬品の和鏡・漆製品・刀などが注目される。縄文時代は、早期～後期の竪穴住居跡と土坑が調査された。

・厚真川左岸 無名の沢右岸

上幌内1遺跡 (30)

擦文文化期～アイヌ文化期の複数の炉跡をもつ平地住居跡がみつき、縄文時代早期・中期・後期の竪穴住居跡や土坑なども調査された。

・厚真川左岸

上幌内4遺跡 (124)

平成26 (2014) 年度に当センターが黒色土層上面の調査を行い、縄文時代中期～後期の遺物が出土した。次年度以降も調査予定である。

・厚真川左岸 無名の沢の両岸

上幌内5遺跡 (125)

平成25 (2013) 年度から当センターが調査を開始し、Tピットを確認した。次年度以降も調査予定である。

・厚真川右岸 イクバンドユクテセ沢右岸

イクバンドユクテセ3遺跡 (120) は、平成25 (2013) 年度に当センターで調査し、遺跡の中央を流れる無名の沢で地区分けをした。

・無名の沢左岸

イクバンドユクテセ3遺跡A地区

アイヌ文化期の柱穴・杭穴、焼土、礫集中を確認し、平地住居跡と判断できるものもある。アイヌ文化期の遺跡では、最上流部に立地する。

・無名の沢右岸

イクバンドユクテセ3遺跡B地区

縄文時代中期～後期の竪穴住居跡やTピットを調査した。また、調査区の南側部分の黒色土層中で、礫石器や礫が多数みられ「大規模な礫集中」と呼称した。

・イクバンドユクテセ沢 左岸

イクバンドユクテセ遺跡 (87)

主な時代は縄文時代後期で、試掘調査では土器・石器・礫が出土した。標高92～96m付近に立地し、ダム完成後も湛水地域でないため、現在のところ発掘調査の予定はない。

・厚真川右岸

イクバンドユクテセ2遺跡 (119) (本報告書 北埋調報319)

平成25 (2013) 年度に、当センターが、縄文時代中期～後期の土坑とTピットを調査し、現在、最も上流に位置する遺跡である。

・厚真川とメンクルナイ沢との合流点付近 (厚真ダム堤体付近)

地域住民への聞き込み調査で、厚真ダム付近にも遺跡があったとの記述がある (厚真町教育委員会 2014)

(奥山さとみ)

III章 調査の概要

1. 発掘区の設定

調査区を示した図は日本測地系であり、これらを世界測地系に変換して行った。次の図面や成果について室蘭建設管理部 厚幌ダム建設事務所から提供を受けた。

- ・『平成8年度 厚幌ダム建設基準点測量3級基準点 幌内地区 成果表』北海道室蘭土木現業所
- ・『平成12年度 厚幌ダム建設用地測量(資料整理)現況平面図 1:1,000』北海道室蘭土木現業所
- ・『平成24年度 厚幌ダム建設工事 資料整理 現況平面図 1:1,000』北海道室蘭土木現業所
(平成15年十勝沖地震に伴う基準点成果を改定・補正 PatchJGD・tokachi2003.par Ver.1.0.0)
- ・『厚幌ダム平面図 1:2,500 平成24年度 計測航空レーザ・空中写真 日本測地系』
室蘭建設管理部
- ・『厚幌ダム建設工事 1:5,000 (日本測地系)』室蘭開発建設部 厚幌ダム建設事務所

表4 測量基準杭一覧表

杭名	種類		世界測地系 平面直角座標 (m) X II系 (平成15年十勝沖地震に伴う 基準点改正)		標高 (改測値) (m)	備考
			X	Y		
H8N003-31 (331)	3級基準点	既知点	-134,627.740	-18,191.940	83.628	平成9年3月 設置 標高: 83.884 真北方位角: 0 08 54.6
			日本測地系 平面直角座標 (m) X II系			
			-134,891.207	-17,885.263		
			北緯 42 47 07.4	東経 142 01 52.9		
T M-1	4級基準点	既知点 遺跡範囲基準点	-134,705.472	-18,440.059		平成24年度 設置
T M-2	4級基準点	既知点 遺跡範囲基準点	-134,678.977	-18,350.760		平成24年度 設置
T M-3	4級基準点	既知点 遺跡範囲基準点	-134,663.116	-18,303.477		平成24年度 設置
T M-4	4級基準点	既知点 遺跡範囲基準点	-134,645.014	-18,243.454		平成24年度 設置
T M-8	4級基準点	既知点 遺跡範囲基準点	-134,582.680	-18,264.715		平成24年度 設置
H20 (KBM NO.)	仮 ベンチマーク	既知点			79.650	平成24(2012)年
H-25	調査区グリッド 平面直角座標 交点		-134,600.000	-18,300.000		調査区外
			地理座標 (° ' ")			
			北緯	東経		
			42 47 17.3	142 01 34.7		

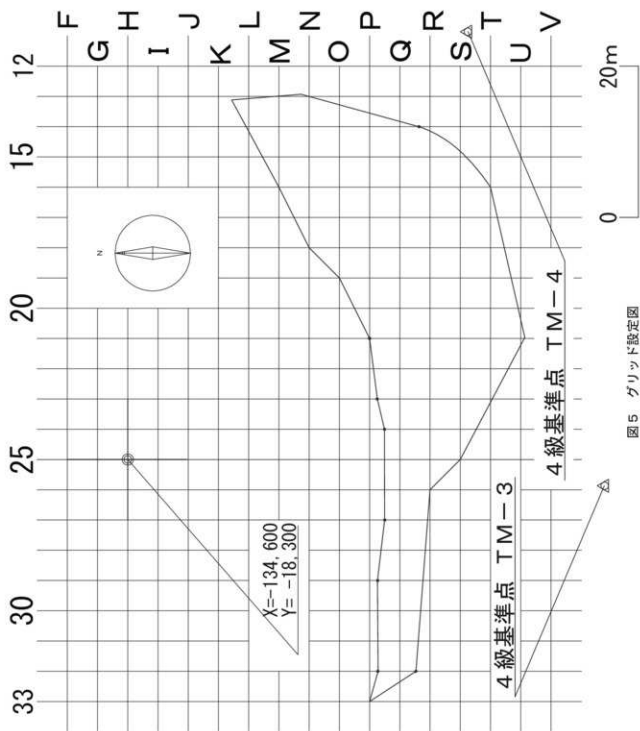


図5 グリッド設定図

調査グリッドは、平面直角座標（第XⅡ系）で設定した。X=-134,600mとY=-18,300mの交点を基点とし、これを「H-25」とし、南北方向はアルファベット、東西方向は算用数字で4mごとに区切った。アルファベットは南方向へ昇順とし「V」まで、東西方向は、東方向へ数字が小さくなり、西方向へと大きくなる。グリッドは4m区画で、呼称は北東側の杭名とし、アルファベットと算用数字を列記する（図5 表4）。

平成24年度に、調査区と伐採の範囲を確定するための測量を行った。山側にあたる調査区の北側は、標高85.4m（厚幌ダムの常時満水位）の地点を調査区の境界とした。この時に設けた4級基準点と既知の3級基準点（平成8年度）から、平成25年度、調査のためのグリッド杭を打設した。水準測量は、遺跡近くの仮ベンチマーク「H20」を基準点とした。

2. 基本土層

基本土層は、これまでの厚真町教育委員会による発掘調査や当センターの成果を踏まえ、次のように区分した。色調及び土層の観察項目は『標準土色帖』（小山・竹原 1967）と『土壌調査ハンドブック』（ペドロジスト懇談会 1984）による。

I層：現地表土

黒色を呈する耕作土や森林表土で、II層軽石（Ta-b）を含む。

II層：樽前b降下軽石層

1667年に降下した樽前b降下軽石層（Ta-b）である。

III層：黒色土層

約2千年前～近世アイヌ文化期（1667年）の黒色土層である。

IV層：樽前c降下火山灰層

約2千年前に降下した樽前山の火山灰層である。

V層：黒色土層

縄文時代晩期後半～同早期までの遺物包含層で、発掘調査の対象の層である。

VI層：漸移層

黒色土層が下位の層へと漸移的に変化する層である。

VII層：樽前d火山噴出物層

大きく三つの層に分けられ、すべて遺物を含まない地山である。「Ta-d」と表記する。

Ⅶ1層：暗赤褐色で、Ta-d2層と考えられる。

Ⅶ2層：赤褐色で、Ta-d2層と考えられる。

Ⅶ3層：黄色系の色調で、Ta-d1層と考えられる。

赤褐色の色調のTa-d2層が上位にあることから、二次堆積の可能性が考えられる。

VIII層：黄灰色を呈する粘土層

土層断面図は、R-21・22区で柱状図（図6）を作成した。V層上位で近くのTP-10の掘り上げ土と考えられる土層の堆積がみられた。基本土層は、同時に調査したイクバンドユクチセ3遺跡と対照できるように表5にまとめた。

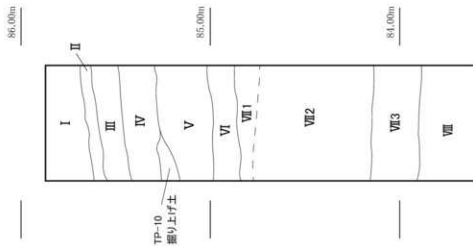


図 6 基本土層図

(R-21・22区(TP-10付近))

表 5 基本土層観察表

層名	基本土層		R-21・22区(TP-10付近)																
	平均単位重量(γ _{sat})	土質	基本土層		R-21・22区(TP-10付近)														
			土質	標準貫入値	層名	土質	層厚	掘り上げ	標準貫入値	土質	層厚	掘り上げ	標準貫入値	土質	層厚	掘り上げ			
1層	22	*	*	*	硬粘土	0.85	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ
2層	8	*	*	γ _{sat} =9	硬粘土	0.85	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ
3層	13	軟粘土	0.82(1)		硬粘土	0.85	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ
4層	19	軟粘土	0.80(1.5)	γ _{sat} =9	硬粘土	0.85	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ
5層	25	硬粘土	1.00(1)		硬粘土	0.85	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ
6層	12	硬粘土	1.00(1.5)		硬粘土	0.85	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ
7層	13	硬粘土	1.00(1.5)	標準貫入値 1.00(1.5)	硬粘土	0.85	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ
8層	13	硬粘土	1.00(1.5)	標準貫入値 1.00(1.5)	硬粘土	0.85	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ
9層	25	硬粘土	1.00(1.5)	標準貫入値 1.00(1.5)	硬粘土	0.85	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ
10層	25	硬粘土	1.00(1.5)	標準貫入値 1.00(1.5)	硬粘土	0.85	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ	硬粘土	0.85	0.75	掘り上げ

3. 調査の方法

はじめに建設機械によりI層～IV層下位までを除去し(表土・火山灰除去)、次に人力で残りのIV層を掘り、V層上面を検出した。必要に応じ地山(VII層)まで先行してトレンチ調査・25%調査等を行い、事前に土量や遺構・遺物のあり方の情報を集約・検討し全体の調査計画をたてた。

包含層を掘り下げの度に検出面を清掃し、遺構の確認に努めた。遺構と予想される部分は半截し、土層断面や壁の立ち上がり、坑底面の状況から判断した。地形測量図は調査の進行状況に合わせ、最終面のVII層上面で作成した。本遺跡の主たる時期は縄文時代中期・後期である。

4. 整理の方法

(1) 一次整理の方法

土器・石器等の遺物は、現場で「遺跡名(略号;イ2) 出土地点(遺構名・グリッド) 出土層位 遺物種別(土器・剥片石器・礫石器とレキ・その他の四つに大別)・取り上げ番号(出土位置記録のもの)・取り上げ年月日」の情報を記したビニール袋に取り上げた。現場事務所では袋ごとに「取り上げ台帳」に記録し、一次整理作業の流れを管理した。遺物は「水洗」・「乾燥」した後、「分類」し、出土地点・出土層位・遺物名等の遺物個別の情報を「遺物カード」に記し、遺物とともにビニール袋に収納した。また、その遺物カードの記載事項を一覧表にまとめ、Excel文書の「遺物登録台帳」を作成し、二次整理作業を進めるための基本情報とした。

接合作業を行う土器は、遺物カードの情報の一部を直接遺物に「注記」した。内容は「遺跡名(イ2) 出土地点 出土層位 遺物番号」である。礫石器やレキは多数出土した。使用・加工痕が不明瞭なもの、破片化したもの、脆弱な岩石で土と化したもの等がある。これらの中には、特定できない礫石器の一部もあると思われる。出土した礫石器・レキの総体を勘案し、これらの一部は、現場でカード作成・遺物台帳登録までの記録を作成した。その際に、一眼デジタルカメラで撮影したものもある。これらの扱いについて、遺物登録台帳に記載した。

(2) 二次整理の方法

・土器

土器の接合作業は、残存状態が「良好」・「剥離」のものを中心にを行い、遺構出土土器の接合は遺構内、遺構間、遺構が位置するグリッド、周辺のグリッドへと展開し、包含層出土のものは、破片が多いグリッドから周囲へ広げるように進めた。接合した破片は復元可能なものを接着して復原し、立面図等の実測図を作成した。破片は、特徴が認識しやすい口縁部や底部の破片を中心に選出し、拓影図と垂直方向の断面図を組み合わせて図示した。すべての掲載土器は観察表を作成した。

・石器等

石器等は、残存状態が「完形」・「準完形」のものを中心に、器種や形態の多様性を示せることを考慮して、掲載する石器を選び出し、実測図と観察表を作成した。

5. 遺物の分類基準

土器は、表6「土器時期分類基準」・表7「土器部位分類基準」・表8「土器残存状態分類基準」で、石器等は表9「石器等器種分類基準」・表10「石器等残存状態分類基準」・表11「岩石分類体系表」・表12「岩石(石材)の略号」で分類した。

(未完)

表6 土器時期分類基準

種別	時代	時期	群	類	土器群・型式名
土器	縄文時代	早期	I群	a類	貝殻文・条痕文・沈線文を有する土器群
				b類	東側路式系土器群
		前期	II群	a類	縄文尖底土器群
				b類	円筒土器下層式 それに伴う土器群
		中期	III群	a類	円筒土器上層式・サイベ沢Ⅵ式 萩ヶ岡1式・萩ヶ岡2式に相当する土器群
				b類	萩ヶ岡3式(天神山式)・柏木川式 北筒式に相当する土器群
		後期	IV群	a類	余市式・タゾロブ式・入江式に相当する土器群
				b類	ウサクマイC式・手稲式・ホッケマ式に相当する土器群
				c類	堂林式・三ッ谷式・御殿山式に相当する土器群
		晩期	V群	a類	大洞B式・大洞B'式 それに伴う土器群
				b類	大洞C1式・大洞C2式 それに伴う土器群
				c類	大洞A式・大洞A'式 それに伴う土器群
	続縄文時代			VI群	続縄文式土器
弥文時代			VII群	弥文土器	
時期不明・判断不可能なもの			不明	剥離や磨耗、小破片が多い	

表7 土器部位分類基準

部位・名称	内容
口縁部	・口唇部が残存するもの ・口唇部は残存しないが、これに近い部位と判断できるもの
底部	・底面が残存するもの ・底面は残存しないが、これに近い部位と判断できるもの
胴部	・口縁部・底部・不明・その他以外のもの
不明	・部位を特定できないもので、小破片に多い

表8 土器残存状態分類基準

呼称	内容	備考
良好	・器の形状を留める個体土器 ・破片の表裏面及び割れ口の残存状態が良いもの	・接合可能な破片 ・文様等が残り、時期判断等に有効な情報が多い
剥離	・破片の表裏面のいずれか、あるいは両面が約1/2以上剥離・剥落しているもの	・接合可能な破片 ・文様が残る場合、時期判断等に有効な情報を有する ・剥離面は胎土の観察に適する ・破片化した後、人為的に加工されたものもある(再生土製品)
磨耗	・破片が磨耗しているもの	・磨耗した割れ口は接合に耐えられない ・文様等の磨滅により、破片そのものの情報は少ない ・遺物の二次的な移動を考慮の上で有意な情報を有する ・破片化した後、人為的に加工されたものもある(再生土製品)
小破片	・大きさが長径2cm程度以下の小さな破片	・破片が小さいため接合に適さず、復原作業に与える影響も少ない ・破片そのものの情報は少ない ・小さいため注記できないものもある ・ある破片に接合した場合、接合関係についての情報が得られる

表9 石器等器種分類基準

分類	器種・名称	備考	主要な石材
剥片石器	石鏃		黒曜石 頁岩 等
	石槍・ナイフ		
	石錐		
	つまみ付きナイフ	「石匙」	
	スクレイパー		
	U・Rフレイク	定型的な形態を有さないが、人為的な使用痕・加工痕が認められるフレイク U=utilized R=retouched	
	石核		
	フレイク・チップ		
礫石器	磨製石斧		泥岩 片岩 等
	磨製石斧原石		
	たたき石		安山岩 砂岩 凝灰岩 等
	すり石		
	北海道式石冠		
	石錘		
	砥石		
	台石・石皿		
石製品	名称・通称	玉	各種
礫	加工・使用痕のある礫	人為的な使用痕・加工痕が認められる礫	各種
	レキ（自然礫）	自然礫であるが、遺跡に人為的に持ち込まれたと考えられるもの	

表10 石器等残存状態分類基準

分類	残存状態	内容
剥片石器・石製品	完形	残存する部分が90%以上のもの
	準完形	「完形」と「半形」の中間的なもの 完形に近いもの
	半形	残存する部分が50%程度のも
	片	残存する部分が50%程度未満のもの
礫石器	完形	大きな割れ口が無いもの 割れ口を有しても機能部が損なわれていないもの
	準完形	割れ口があり、完形の状態を想定でき、残存する部分が75%程度のも
	半形	割れ口があり、完形の状態を想定でき、残存する部分が50%程度のも
	片	割れ口があり、完形の状態を想定し難く、残存する部分が50%程度未満のもの
礫	完形	割れ口のないもの
	片	割れ口があるもの

表11 岩石分類体系表

火成岩		優白岩 (酸性)	中性岩 (中性)	優黒岩 (塩基性岩)	超塩基性岩
火山岩	火山噴出物 (多孔質)	溶岩 (地表に出たマグマが冷え固まったもの)			
	ガラス質 (非結晶質) 石基のみ	浮岩 (軽石)	岩澤 (スコリア)		—
	斑状組織微晶 石基	黒曜岩 (石)	—		—
	斑状組織微晶 石基	流紋岩	安山岩	玄武岩	—
半深成岩	斑状組織細晶	石英斑岩	ヒン岩	輝緑岩	—
深成岩	等粒状組織 完結晶	花崗岩	閃緑岩	斑曜岩	橄欖岩 蛇紋岩
二酸化ケイ素 (ケイ酸 SiO ₂)		66%以上	52~66%	52%以下	45%以下
有色造岩鉱物 (色指数)		10%以下	10~30%	30%以上	60~70%以上
主体的な有色造岩鉱物		黒雲母	輝石		橄欖石 蛇紋石
主体的な無色造岩鉱物		石英 斜長石	斜長石		—
堆積岩					
火山砕屑岩 : 火山噴出物から構成される					
火山角礫岩 : 32mm以上の火山噴出物 (火山岩塊) 50%以上含む					
凝灰角礫岩 : 32mm以上の火山噴出物 (火山岩塊) 50%未満含む					
火山礫凝灰岩 : 2~32mmの火山噴出物 (火山礫) から主体的に構成される					
凝灰岩 (溶結凝灰岩) : 2mm以下の火山噴出物 (火山灰) から主体的に構成される					
砕屑岩 : 丸みを帯びた鉱物片、岩片等から構成され「層理」がみられる					
礫岩 : 粒度区分上の礫を50%以上含む					
角礫岩 : 含有する礫が角ばっている (亜角~角礫状) もの					
砂岩 : 粒度区分上の砂を50%以上含む					
・ 砂の粒度により「粗粒」・「細粒」に、硬さにより「硬質」・「軟質」等に分けられる					
泥岩 : 粒度区分上の泥 (シルト・粘土) 50%以上から構成される					
・ 粒度区分から「シルト岩」と「粘土岩」に分けられる					
頁岩 : 泥岩で固結が強く、貝殻状の割れ口を呈するもの					
建質頁岩 : 頁岩で透明な石英質 (ケイ酸 SiO ₂) 部分を含むもの					
粘板岩・千枚岩 : 堆積岩と変成岩の中間的なもの					
有機岩					
チャート : 潜晶質石英 (SiO ₂)					
・ 有機質 (生物遺体)					
・ 無機質					
変成岩					
変成鉱物から構成される結晶質					
接触 (熱) 変成岩 : 熱による変成作用を受けたもの					
ホルンフェルス : 堆積岩が熱変成作用を受け、微粒状組織となったもの					
広域変成岩 : 熱・圧力による変成作用を受けたもの					
片岩 : 再結晶化により「片理」がみられるもの					
片麻岩 : 再結晶化が進行し、「斑状変晶」や「片麻状組織」がみられるもの					
石製品・玉類の石材					
超塩基性岩					
蛇紋岩 : 蛇紋石・橄欖石を主成分とするもので橄欖岩等が変成したもの					
蛇紋岩からの変成岩					
ロジン岩 : 蛇紋岩化作用により、生じる変成岩					
緑泥石岩 : 輝石・角閃石・黒雲母等の二次変質により生じる鉱物 (緑泥石) を主成分とする岩石					
(緑泥片岩・緑色片岩)					
タルク岩 (滑石片岩) : 橄欖岩・輝石・角閃石等の二次変質により生じる鉱物 (滑石) を主成分とする岩石					

* 石英質（ケイ酸 SiO₂）の岩石・鉱物の便宜的な分類体系

堆積岩	チャート	; チャートのうち、明瞭な貝殻状断口を呈するもの 火打ち石
	フリント	
	珪質頁岩	
	珪藻岩	
変成岩	珪岩（珪石）	; 珪藻類のケイ酸質遺骸が堆積し生じたもの
鉱物	水晶	; 無色透明の石英 結晶質
	碧玉	; 隠微品質の石英で酸化鉄を多量に含む 不透明 暗緑～緑暗色
	玉髄	; 隠微品質の石英で比較的均質なもの 淡褐～灰色
	めのう	; 隠微品質 繊維状・縞状 不透明 玉髄の一種

表12 岩石（石材）の略号

大項目	小項目	岩石名	英語名	略号
火成岩	火山噴出物	軽石（浮岩）	Pumice	Pum
		岩滓（スコリア）	Scoria	Sco
	溶岩	溶岩	Lava	Lav
	火山岩	黒曜石（黒曜岩）	Obsidian	Obs
		流紋岩	Rhyolite	Rhy
		安山岩	Andesite	And
		玄武岩	Basalt	Bas
	深成岩	花崗岩	Granite	Gra
		閃緑岩	Diorite	Dio
		斑輝岩	Gabbro	Gab
堆積岩	火山砕屑岩	火山礫凝灰岩	Lapilli Tuff	Ltu
		凝灰岩	Tuff	Tuf
	砕屑岩	礫岩	Conglomerate	Con
		砂岩	Sandstone	San
		泥岩	Mudstone	Mud
		(緑色泥岩)	(Green Mudstone)	(Gr Mud)
		頁岩	Shale	Sha
		チャート	Chert	Che
粘板岩	Slate	Sla		
変成岩	片岩	Schist	Sch	
	片麻岩	Gneiss	Gns	
	ホルンフェルス	Hornfels	Hor	
超塩基性岩	蛇紋岩	Serpentinite	Ser	
	橄欖岩	Peridotite	Per	

IV章 遺 構

1. 概要

調査した遺構は、土坑2基、Tビット11基である。調査区は沢状の地形がみられ、これを挟む東西両側の平坦部と緩斜面部に遺構がある。東側部分では、土坑P-1・2とTビット5か所、西側ではT P-6～11を調査した(図7 表13～16)。

規模や形態、土層断面の状況から、P-1はTビットの可能性があり、P-2は遺構でないかもしれない。Tビットは平面が楕円形のものが多く、T P-2・4・5・6・10・11では杭穴を確認した。T P-8・9は細長い溝状で、切り合うものである。

これらの時期は、遺構の覆土及び、包含層出土の土器から、縄文時代中期後半～後期前半と判断される。また、本遺跡では礫石器・自然礫が多いが、これらは、遺構の上位にある黒色土を主とする覆土にもみられ、遺構が埋没する過程で流れ込んだものと考えられる。

2. 土坑

P-1 (図8 図版2)

位 置 Q・R-15・16区

規 模 1.40×1.02 / 0.89×0.75 / 0.80 m 平面形態 楕円形

確認・調査 包含層調査完了後、楕円形の黒色土がみられ、短軸方向で半載したところ、壁と坑底面を確認し遺構と認定した。土層断面を記録し完掘した。確認当初、土坑を表す「P」を付したが、規模や形態からTビットの可能性はある。

覆 土 14層に細分した。上位はV層の黒色土が堆積し、下位はTa-d層が主である。

壁・坑底面 壁は直立気味に立ち上がり、坑底面は平坦である。

付属遺構 なし。

遺物出土状況 覆土から礫石器等が出土した。

時 期 遺跡の主たる時期である縄文時代中期後半～後期前半と考えられる。

P-2 (図8 図版2)

位 置 P-14・15区

規 模 1.84×1.04 / 1.06(0.85)×0.48 / 0.46(0.66) m 平面形態 不整な楕円形

確認・調査 包含層調査完了後、不整形な黒色土がみられ、半載したところ、壁と坑底と思われる面を確認し遺構とした。土層断面を記録し完掘した。遺構の坑底面は土層断面図の覆土3の下の層界と考えられ、これより下は風倒木痕あるいは木根痕等による攪乱で、これを切って構築されていると推測する。

覆 土 3層に分けた。黒色土が主である。

壁・坑底面 壁は曲線的に広がり、坑底面は凹凸がみられる。

遺物出土状況 覆土からⅢ群・Ⅳ群土器、礫石器等が出土した(図22-1・2 表25)。

時 期 遺跡の主たる時期である縄文時代中期後半～後期前半と考えられる。

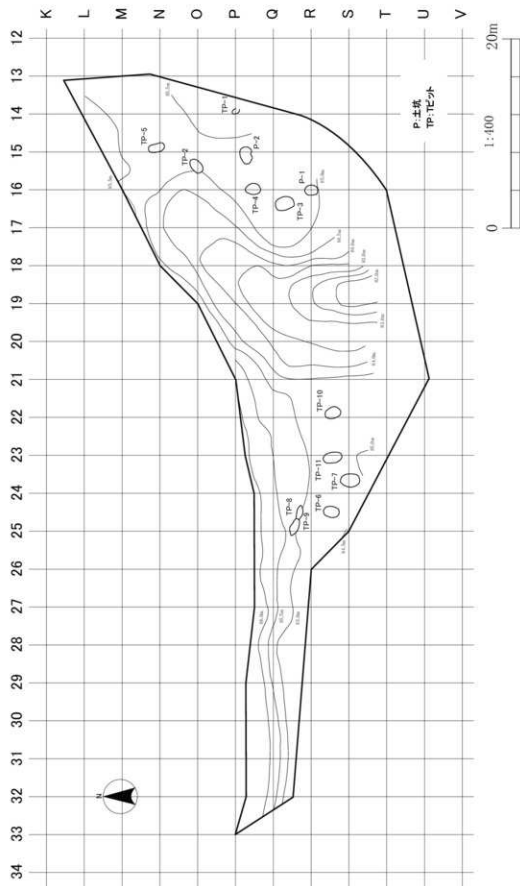
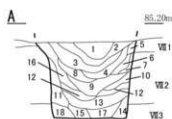
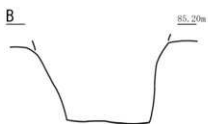
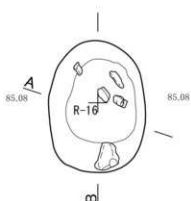


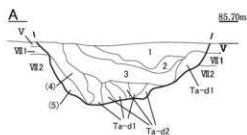
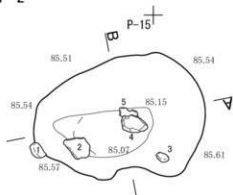
図7 遺構位置図・Ⅶ層上面地形測量図

P-1



遺構名	遺構番号	主体形状	主体形状寸	方位		傾斜	傾斜角度	備考
				形状	方位			
P-1	1	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径
	2	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径
	3	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径
	4	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径
	5	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径
	6	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径
	7	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径
	8	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径
	9	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径
	10	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径
	11	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径
	12	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径
	13	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径
	14	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径
	15	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径
	16	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径
	17	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径
	18	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径

P-2



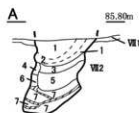
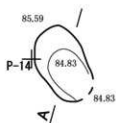
番号	形状・用途	形状寸法	材料	高さ	傾斜	備考
1	レキ	片	凝灰岩	1	0	舗装
2	レキ	片	凝灰岩	1	0	
3	加工・使用済あるレキ	片	砂岩	1	0	
4	加工・使用済あるレキ	片	砂岩	1	0	85.63
5	レキ	片	砂岩	1	0	



遺構名	遺構番号	主体形状	主体形状寸	方位		傾斜	傾斜角度	備考
				形状	方位			
P-2	1	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径
	2	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径
	3	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径
	4	円形	直径	10.00	0.00	0	0	10.00m 直径

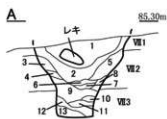
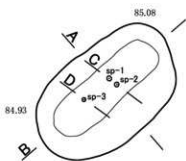
図8 P-1・P-2

TP-1



遺構名	発掘層 層位	主材種	構造	土質区分	位置			延長	幅	備考
					名称	中心点座標	基点			
TP-1	1	土層	硬質土	硬質土	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	2	土層	硬質土	硬質土	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	3	土層	硬質土	硬質土	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	4	土層	硬質土	硬質土	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	5	土層	硬質土	硬質土	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	6	土層	硬質土	硬質土	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
掘削層位	+	+	+	+	+	+	+	+	+	掘削層位?

TP-2



遺構名	発掘層 層位	主材種	構造	土質区分	位置			延長	幅	備考
					名称	中心点座標	基点			
TP-2	1	土層	硬質土	硬質土	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	2	土層	硬質土	硬質土	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	3	土層	硬質土	硬質土	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	4	土層	硬質土	硬質土	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	5	土層	硬質土	硬質土	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	6	土層	硬質土	硬質土	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	7	土層	硬質土	硬質土	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	8	土層	硬質土	硬質土	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	9	土層	硬質土	硬質土	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	10	土層	硬質土	硬質土	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	11	土層	硬質土	硬質土	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	12	土層	硬質土	硬質土	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	13	土層	硬質土	硬質土	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
掘削層位	+	+	+	+	+	+	+	+	+	掘削層位?

図9 TP-1・TP-2

3. Tピット

TP-1 (図9 図版3)

位置 O・P-13区

規模 $0.82 \times 0.52 / (0.55) \times 0.36 / 0.78$ m 平面形態 楕円形

確認・調査 包含層調査完了後、楕円形の黒色土があり、短軸方向で半截したところ、壁と坑底面を確認し遺構と判断した。土層断面を記録した後完掘した。

覆土 7層に細分した。上位はV層の黒色土、下位はTa-d層が主で、薄層がみられる。

壁・坑底面 壁の立ち上がりは不明瞭で、坑底面は傾斜が強い。

付属遺構 なし。

遺物出土状況 出土しなかった。

時期 遺跡の主たる時期である縄文時代中期後半～後期前半と考えられる。

TP-2 (図9 図版3)

位置 N・O-15区

規模 $1.69 \times 1.02 / 1.33 \times 0.44 / 0.82$ m 平面形態 楕円形

確認・調査 包含層調査完了後、楕円形の黒色土があり、短軸方向で半截したところ、壁と坑底面を確認し遺構と判断した。土層断面を記録した後完掘した。

覆土 13層に細分した。上位はV層の黒色土、下位はTa-d層が主である。

壁・坑底面 壁は直立気味に立ち上がり、壁の中位付近で曲線的に開く、坑底面は平坦である。

付属遺構 中央付近で、杭穴 (s p-1～3) を3か所確認した。いずれも細く先端部が尖る。

遺物出土状況 覆土からIV群土器、石鏃、礫石器等が出土した (図22-3 表25・図25-1 表26)。

時期 遺跡の主たる時期である縄文時代中期後半～後期前半と考えられる。

TP-3 (図10 図版3・4)

位置 Q-16区

規模 $1.95 \times 1.42 / 1.26 \times 0.60 / 0.82$ m 平面形態 楕円形

確認・調査 包含層調査完了後、楕円形の黒色土がみられ、短軸方向で半截したところ、壁と坑底面を確認し遺構と判断した。土層断面を記録した後完掘した。

覆土 10層に細分した。上位はV層の黒色土、下位はTa-d層が主である。

壁・坑底面 壁は曲線的に大きく開くように立ち上がり、坑底面は平坦である。

付属遺構 なし。

遺物出土状況 覆土からIV群土器、たたき石等の礫石器が出土した (図22-4 表25・図27-38 表26)。

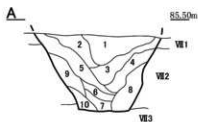
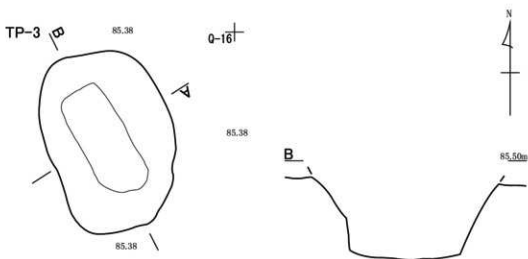
時期 遺跡の主たる時期である縄文時代中期後半～後期前半と考えられる。

TP-4 (図10 図版4)

位置 P-15・16区

規模 $1.64 \times 1.15 / 1.15 \times 0.75 / 0.80$ m 平面形態 楕円形

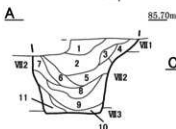
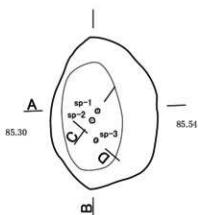
確認・調査 包含層調査完了後、楕円形の黒色土があり、短軸方向で半截したところ、壁と坑底面を確認し遺構と判断した。土層断面を記録した後完掘した。



遺構名	発掘層 層位	土層別	厚さ	全長(採寸)	位置			備考	備考
					名称	中心点(採寸)	傾斜		
TP-3	1	1.18	0.02	0.02	遺構	210	210	0	1.18(210)0.02
	2	1.18	0.02	0.02	遺構	210	210	0	1.18(210)0.02
	3	1.18	0.02	0.02	遺構	210	210	0	1.18(210)0.02
	4	1.18	0.02	0.02	遺構	210	210	0	1.18(210)0.02
	5	1.18	0.02	0.02	遺構	210	210	0	1.18(210)0.02
	6	1.18	0.02	0.02	遺構	210	210	0	1.18(210)0.02
	7	1.18	0.02	0.02	遺構	210	210	0	1.18(210)0.02
	8	1.18	0.02	0.02	遺構	210	210	0	1.18(210)0.02
	9	1.18	0.02	0.02	遺構	210	210	0	1.18(210)0.02
	10	1.18	0.02	0.02	遺構	210	210	0	1.18(210)0.02

TP-4

P-16



遺構名	発掘層 層位	土層別	厚さ	全長(採寸)	位置			備考	備考
					名称	中心点(採寸)	傾斜		
TP-4	1	1.18	0.02	0.02	遺構	210	210	0	1.18(210)0.02
	2	1.18	0.02	0.02	遺構	210	210	0	1.18(210)0.02
	3	1.18	0.02	0.02	遺構	210	210	0	1.18(210)0.02
	4	0.02	0.02	0.02	遺構	210	210	0	0.02(210)0.02
	5	1.18	0.02	0.02	遺構	210	210	0	1.18(210)0.02
	6	1.18	0.02	0.02	遺構	210	210	0	1.18(210)0.02
	7	1.18	0.02	0.02	遺構	210	210	0	1.18(210)0.02
	8	1.18	0.02	0.02	遺構	210	210	0	1.18(210)0.02
	9	1.18	0.02	0.02	遺構	210	210	0	1.18(210)0.02
	10	1.18	0.02	0.02	遺構	210	210	0	1.18(210)0.02

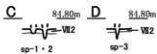
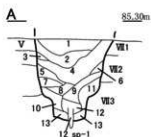
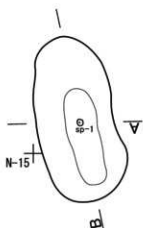


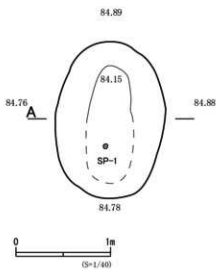
図10 TP-3・TP-4

TP-5

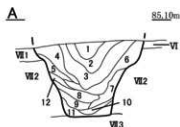


遺構名	位置 計測座標	土層階	形状	土物成分	色相			備考	
					色名	ヤシロト色名	照度		
TP-5	1	4	○	○	○	○	○	○	○
	2	1.5m	○	○	○	○	○	○	○
	3	1.5m	○	○	○	○	○	○	○
	4	1.5m	○	○	○	○	○	○	○
	5	1.5m	○	○	○	○	○	○	○
	6	1.5m	○	○	○	○	○	○	○
	7	1.5m	○	○	○	○	○	○	○
	8	1.5m	○	○	○	○	○	○	○
	9	1.5m	○	○	○	○	○	○	○
	10	1.5m	○	○	○	○	○	○	○
	11	1.5m	○	○	○	○	○	○	○
	12	1.5m	○	○	○	○	○	○	○
	13	1.5m	○	○	○	○	○	○	○
埋土(遺構)	4	埋土	○	○	○	○	○	○	埋土(遺構)
埋土(遺構)	12	埋土	○	○	○	○	○	○	埋土(遺構)

TP-6

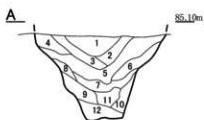
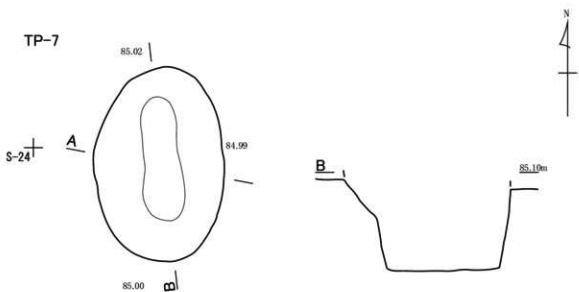


R-24

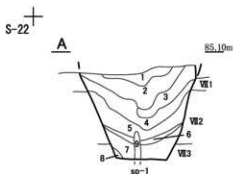
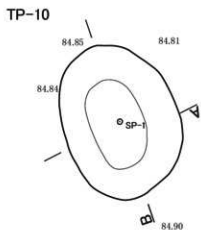


遺構名	位置 計測座標	土層階	形状	土物成分	色相			備考
					色名	ヤシロト色名	照度	
TP-6	1	4	○	○	○	○	○	○
	2	4	○	○	○	○	○	○
	3	4	○	○	○	○	○	○
	4	4	○	○	○	○	○	○
	5	4	○	○	○	○	○	○
	6	4	○	○	○	○	○	○
	7	4	○	○	○	○	○	○
	8	4	○	○	○	○	○	○
	9	4	○	○	○	○	○	○
	10	4	○	○	○	○	○	○
	11	4	○	○	○	○	○	○
	12	4	○	○	○	○	○	○
	埋土(遺構)	4	埋土	○	○	○	○	○

図11 TP-5・TP-6



測線名	測線番号	主軸距離	測距	土質区分	地質				備考
					層名	平均含水率(%)	種類	状態	
TP-7	1	1.38	2.02	砂土	砂質地	2.02	1.1	砂	埋設物あり
	2	1.38	2.02	砂土	砂質地	2.02	1.1	砂	埋設物あり
	3	1.38	2.02	砂土	砂質地	2.02	1.1	砂	埋設物あり
	4	1.38	2.02	砂土	砂質地	2.02	1.1	砂	埋設物あり
	5	1.38	2.02	砂土	砂質地	2.02	1.1	砂	埋設物あり
	6	1.38	2.02	砂土	砂質地	2.02	1.1	砂	埋設物あり
	7	1.38	2.02	砂土	砂質地	2.02	1.1	砂	埋設物あり
	8	1.38	2.02	砂土	砂質地	2.02	1.1	砂	埋設物あり
	9	1.38	2.02	砂土	砂質地	2.02	1.1	砂	埋設物あり
	10	1.38	2.02	砂土	砂質地	2.02	1.1	砂	埋設物あり
	11	1.38	2.02	砂土	砂質地	2.02	1.1	砂	埋設物あり
	12	1.38	2.02	砂土	砂質地	2.02	1.1	砂	埋設物あり



測線名	測線番号	主軸距離	測距	土質区分	地質				備考
					層名	平均含水率(%)	種類	状態	
TP-10	1	1.38	2.02	砂土	砂質地	2.02	1.1	砂	埋設物あり
	2	1.38	2.02	砂土	砂質地	2.02	1.1	砂	埋設物あり
	3	1.38	2.02	砂土	砂質地	2.02	1.1	砂	埋設物あり
	4	1.38	2.02	砂土	砂質地	2.02	1.1	砂	埋設物あり
	5	1.38	2.02	砂土	砂質地	2.02	1.1	砂	埋設物あり
	6	1.38	2.02	砂土	砂質地	2.02	1.1	砂	埋設物あり
	7	1.38	2.02	砂土	砂質地	2.02	1.1	砂	埋設物あり
	8	1.38	2.02	砂土	砂質地	2.02	1.1	砂	埋設物あり
地下1層上	+	0.00	0.0	砂地	1.024	0.1	砂	埋	304-0205
地下1層下	+	+	+	+	+	+	+	+	

図12 TP-7・TP-10

覆 土 11層に細分した。上位はV層の黒色土、下位はTa-d層が主である。
壁・坑底面 壁の立ち上がりは直立気味で、壁の中位から曲線的に開く。坑底面は平坦である。
付属遺構 中央付近で、杭穴(s p-1~3)を3か所確認した。
遺物出土状況 覆土から砥石、台石等の礫石器が出土した(図28-44 表26)。
時 期 遺跡の主たる時期である縄文時代中期後半～後期前半と考えられる。

TP-5 (図11 図版4・5)

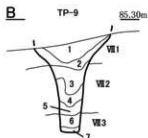
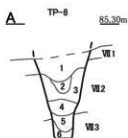
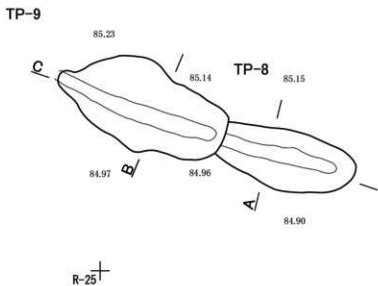
位 置 M-14・15、N-14区
規 模 1.77×0.88 / 1.04×0.35 / 0.86 m **平面形態** 長楕円形
確認・調査 包含層調査完了後、黒色土がみられ、短軸方向で半截したところ、壁と坑底面を確認し遺構と判断した。土層断面を記録した後発掘した。
覆 土 12層に細分した。上位はV層の黒色土、下位はTa-d層が主である。
壁・坑底面 壁は直立気味に立ち上がり、壁の中位より下でさらに広がる。坑底面は中央が若干低い。
付属遺構 土層断面で杭穴(s p-1)を1か所確認した。遺構の中央よりやや北側に位置する。
遺物出土状況 覆土からフレイク、台石が出土した。
時 期 遺跡の主たる時期である縄文時代中期後半～後期前半と考えられる。

TP-6 (図11 図版5)

位 置 R-24区
規 模 (1.66)×1.18 / (1.24)×0.49 / 0.90 m **平面形態** 楕円形
確認・調査 包含層調査完了後、楕円形の黒色土がみられた、半截して壁と坑底面を確認し遺構と判断した。土層断面を記録した後発掘した。なお、南側部分は斜面の崖が近いため、雨天時に崩壊した。
覆 土 12層に細分した。上位はV層の黒色土、下位はTa-d層が主である。
壁・坑底面 壁の立ち上がりは若干開き気味で、壁の上位でさらに開口する。坑底面は平坦である。
付属遺構 坑底の中央からやや南側付近で杭穴(s p-1)を1か所確認した。
遺物出土状況 覆土からつまみ付きナイフ、スクレイパー、磨製石斧等が出土した(図25-2・26-26 表26)。
時 期 遺跡の主たる時期である縄文時代中期後半～後期前半と考えられる。

TP-7 (図12 図版5)

位 置 R-23・24区
規 模 2.07×1.39 / 1.32×0.45 / 0.89 m **平面形態** 長楕円形
確認・調査 包含層調査完了後、楕円形の黒色土があった。短軸方向で半截したところ、壁と坑底面を確認し遺構と判断した。土層断面を記録した後発掘した。
覆 土 12層に細分した。上位はV層の黒色土、下位はTa-d層が主である。
壁・坑底面 壁は直線的に開くように立ち上がり、坑底面には凹凸がある。
付属遺構 なし。
遺物出土状況 覆土からIV群土器、フレイクが出土した(図22-5 表25・図27-38 表26)。
時 期 遺跡の主たる時期である縄文時代中期後半～後期前半と考えられる。



遺構名	発掘層番号	柱線番号	層別	土性区分	色値			粒度	炭密度	備考
					色名	マンセル色色点	L			
TP-8	1	12層	砂質	硬砂土	黄褐色	7.5Y 5.5/1	50	細	0	7層との境界線あり
	2	12-11	砂質	硬砂土	黄褐色	7.5Y 5.5/1	50	細	0	7層との境界線あり
	3	12-10	砂質	硬砂土	黄褐色	7.5Y 5.5/1	50	細	0	7層との境界線あり
	4	12-9	砂質	硬砂土	黄褐色	7.5Y 5.5/1	50	細	0	7層との境界線あり
	5	12-8	砂質	硬砂土	黄褐色	7.5Y 5.5/1	50	細	0	7層との境界線あり
	6	12-7	砂質	硬砂土	黄褐色	7.5Y 5.5/1	50	細	0	7層との境界線あり
TP-9	1	12層	砂質	硬砂土	黄褐色	7.5Y 5.5/1	50	細	0	7層との境界線あり
	2	12-11	砂質	硬砂土	黄褐色	7.5Y 5.5/1	50	細	0	7層との境界線あり
	3	12-10	砂質	硬砂土	黄褐色	7.5Y 5.5/1	50	細	0	7層との境界線あり
	4	12-9	砂質	硬砂土	黄褐色	7.5Y 5.5/1	50	細	0	7層との境界線あり
TP-9	5	12-8	砂質	硬砂土	黄褐色	7.5Y 5.5/1	50	細	0	7層との境界線あり
	6	12-7	砂質	硬砂土	黄褐色	7.5Y 5.5/1	50	細	0	7層との境界線あり
	7	12-6	砂質	硬砂土	黄褐色	7.5Y 5.5/1	50	細	0	7層との境界線あり



図13 TP-8・TP-9

TP-8・TP-9 (図13 図版6)

位 置 TP-8 : Q-24区 TP-9 : Q-24・25区

規 模 TP-8 : (1.48)×0.65 / (1.24)×0.20 / 0.89 m

TP-9 : 1.86 ×0.98 / 1.81 ×0.24 / 0.96 m

平面形態 TP-8 : 溝状 TP-9 : 溝状

確認・調査 包含層調査完了後、細長い溝状の黒色土がみられた。当初、Tビット1基の想定で、短軸方向に土層断面を2か所設定し掘り進めたところ、壁と坑底面を確認し遺構と判断した。なお、坑底面には段があり、西側(TP-9)が低く、2基のTビットが重複するものと判断した。東側のTP-8が古く、西側のTP-9がこれを切り新しい。その後土層断面を記録し完掘した。

覆 土 それぞれ6層、7層に細分した。上位はV層の黒色土、下位はTa-d層が主である。

壁・坑底面 壁の立ち上がりは直立気味で、TP-8は壁の下位、TP-9は壁の上位から開口する。坑底面はともに平坦である。

付属遺構 なし。

遺物出土状況 出土しなかった。

時 期 遺跡の主たる時期である縄文時代中期後半～後期前半か、これよりも古い時期と考えられる。

TP-10 (図12 図版7)

位 置 R-21・22区

規 模 1.66×1.23 / 0.86×0.56 / 0.98 m 平面形態 楕円形

確認・調査 包含層調査完了後、黒色土がみられ、短軸方向で半截したところ、壁と坑底面を確認し遺構と判断した。土層断面を記録した後完掘した。

覆 土 9層に細分した。上位はV層の黒色土、下位はTa-d層が主である。

壁・坑底面 壁は直線的に開くように立ち上がる。坑底面は平坦である。

付属遺構 土層断面で杭穴(sp-1)を1か所確認した。遺構の中央に位置する。

遺物出土状況 覆土からⅢ群土器、砥石等の礫石器が出土した(図22-6 表25)。

時 期 遺跡の主たる時期である縄文時代中期後半～後期前半と考えられる。

TP-11 (図14 図版7)

位 置 R-22・23区

規 模 2.03×1.16 / 1.22×0.56 / 1.02 m 平面形態 楕円形

確認・調査 包含層調査完了後、楕円形の黒色土がみられた、半截して壁と坑底面を確認し遺構と判断した。土層断面を記録した後完掘した。

覆 土 14層に細分した。上位はV層の黒色土、下位はTa-d層が主である。

壁・坑底面 壁の立ち上がりは曲線的に開き、坑底面は平坦である。

付属遺構 中央よりやや南側で杭穴(sp-1)を1か所確認した。

遺物出土状況 覆土からⅢ群・Ⅳ群土器、フレイクが出土した(図22-7・8 表25)。

時 期 遺跡の主たる時期である縄文時代中期後半～後期前半と考えられる。

(未完)

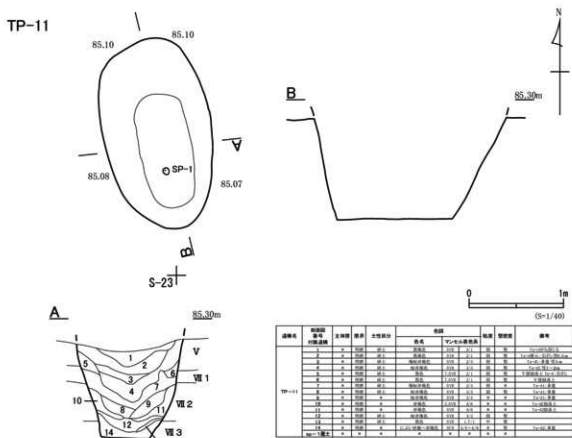


図14 TP-11

表13 遺構規模一覧表

遺構名	図	図版	グリッド	平面 形態	規模 (m)				柱間 距離	土階	出土遺物 石器等	備考
					長さ	短径	長さ	短径				
P-1	8	2	Q・R- 15・16区	楕円形	1.40	1.02	0.89	0.75	0.80	—	右石 加工・使用痕のある礫	—
P-2	8	2	P-14・15区	不整な 楕円形	1.84	1.04	0.85	0.48	0.46 (0.60)	—	加工・使用痕のある礫 レキ	—
TP-1	9	3	O・P-13区	楕円形	0.82	0.52	(0.55)	0.36	0.78	—	—	—
TP-2			N・O-15区	楕円形	1.69	1.02	1.33	0.44	0.82	—	石礫 フレイク 加工・使用痕のある礫	—
TP-2 机穴	9	3	付属遺構名 sp-1 sp-2 sp-3	平面形態 円形 円形 円形				径 深さ 径 深さ 径 深さ 径 深さ 径 深さ 径 深さ	0.06 0.05 0.04 0.04 0.04 0.04	—	—	—
TP-3	10	3・4	Q-16区	楕円形	1.95	1.42	1.26	0.60	0.82	—	—	—
TP-4			P-15・16区	楕円形	1.64	1.15	1.15	0.75	0.80	—	たたま石 石皿 加工・使用痕のある礫	レキ
TP-4 机穴	10	4	付属遺構名 sp-1 sp-2 sp-3	平面形態 円形 円形 円形				径 深さ 径 深さ 径 深さ 径 深さ 径 深さ 径 深さ	0.10 0.09 0.06 0.05 0.11	—	—	—
TP-5			M-14・15、 N-14区	長楕円形	1.77	0.88	1.04	0.35	0.86	—	フレイク 右石	—
TP-5 机穴	11	4・5	付属遺構名 sp-1	平面形態 円形				径 深さ 径 深さ	0.09 (0.30)	—	—	—
TP-6			R-24区	楕円形	(1.60)	1.18	(1.24)	0.49	0.90	—	—	—
TP-6 机穴	11	5	付属遺構名 sp-1	平面形態 円形				径 深さ 径 深さ	0.06 0.06	—	—	—
TP-7	12	5	R-23・24区	長楕円形	2.07	1.39	1.32	0.45	0.89	—	—	—
TP-8	13	6	Q-24区	楕状	(1.48)	0.65	(1.24)	0.20	0.89	—	フレイク	—
TP-9	13	6	Q-24・25区	楕状	1.86	0.88	1.81	0.24	0.96	—	—	—
TP-10			R-21・22区	楕円形	1.66	1.23	0.96	0.56	0.98	—	—	—
TP-10 机穴	12	7	付属遺構名 sp-1	平面形態 円形				径 深さ 径 深さ	0.20 (0.20)	—	—	—
TP-11			R-22・23区	楕円形	2.03	1.16	1.22	0.56	1.02	—	—	—
TP-11 机穴	14	7	付属遺構名 sp-1	平面形態 円形				径 深さ 径 深さ	0.08 0.08	—	—	—

表14 遺構出土土器点数表

遺構名			P-2		TP-2		TP-3		TP-7		TP-10		TP-11		合計			
遺物種別 / 層位			覆土 1層	合計	覆土 1層	合計	覆土 1層	覆土 3層	合計	覆土	合計	覆土	合計	覆土	合計	合計		
時期	部位	残存状態																
III群	口縁部	複数部位	0	0			0			0		0		0		0	0	
		良好															0	
		割離															0	
		磨耗	0	0		0		0		0		0		0		0	0	
	底部	小破片															0	
		良好															0	
		割離	0	0		0		0		0		0		0		0	0	
		磨耗															0	
	胴部	小破片															0	
		良好	1								3		2			6		
		割離										3		3		0		
		磨耗	1	0		0		0		0			1	3		1		
	不明	小破片															0	
		良好															0	
		割離															0	
		磨耗	0	0		0		0		0		0		0		0	0	
	小計			1	1	0	0	0	0	0	0	0	3	3	3	3	7	
	複数部位			0	0			0			0		0		0		0	0
	IV群	口縁部	良好														0	
			割離														0	
磨耗			0	0		0		0		0		0		0		0	0	
小破片																	0	
底部		良好															0	
		割離	0	0		0		0		0		0		0		0	0	
		磨耗															0	
		小破片															0	
胴部		良好	1		21		1	1		2			2			28		
		割離	2	4	1	35			2		2		0		2	0	3	
		磨耗															0	
		小破片	1		13											14		
不明		良好															0	
		割離															0	
		磨耗	0	0		0		0		0		0		0		0	0	
		小破片															0	
小計			4	4	35	35	1	1	2	2	2	0	0	2	2	45		
合計			5	5	35	35	2	2	2	2	3	3	5	5	52			

表15 遺構出土土器片石器点数表

遺構名			TP-2		TP-5		TP-6		TP-7		TP-11		合計	
器種名・分類 / 層位			覆土	合計	覆土	合計	覆土	合計	覆土	合計	覆土	合計	合計	
器種	残存状態	岩石												
石鏃	完形	黒曜石	1										1	
	半完形	—		1		0		0		0		0	0	1
	半形	—											0	
	片	—											0	
つまみ付き ナイフ	完形	黒曜石					1						1	
	半完形	—		0		0		1		0		0	0	1
	半形	—											0	
	片	—											0	
スクレイパー	完形	黒曜石					1						1	
	半完形	—		0		0		1		0		0	0	1
	半形	—											0	
	片	—											0	
U・Rフレイク	—		0		0		0		0		0	0	0	
石核	—		0		0		0		0		0	0	0	
フレイク	黒曜石	1	1	3	3	5	5	1	1	1	1	11	11	
原石	—		0		0		0		0		0	0	0	
合計				2		3		7		1		1		14

表16 遺構出土燧石器・石製品・レキ点数表

遺構名	P-1			P-2			TP-2			TP-3			TP-4			TP-5			TP-6			TP-10			TP-11																
	燧石	磨石	燧石	燧石	磨石	燧石	燧石	磨石	燧石	燧石	磨石	燧石	磨石	燧石	燧石	磨石	燧石	磨石	燧石	燧石	磨石	燧石	磨石	燧石	磨石	燧石	磨石	燧石	磨石	燧石	磨石	燧石	磨石	燧石	磨石	燧石	磨石				
磨石																																									
磨製石斧	燧石			0																																		1	0		
	磨石																																					1	0		
	燧石片																																						1	0	
	燧石																																					1	0		
たたま石	燧石																																							1	0
	磨石																																							1	0
	燧石片																																							1	0
	燧石																																						1	0	
すり石	燧石																																							0	0
	磨石																																						0	0	
	燧石片																																							0	0
	燧石																																						0	0	
北海道式 石皿	燧石																																						0	0	
	磨石																																						0	0	
	燧石片																																							0	0
	燧石																																						0	0	
縄文 打製石器	燧石																																							0	0
	磨石																																						0	0	
	燧石片																																						0	0	
	燧石																																						0	0	
石鏃	燧石																																							0	0
	磨石																																						0	0	
	燧石片																																						0	0	
	燧石																																						0	0	
燧石	燧石																																						0	0	
	磨石																																						0	0	
	燧石片																																						0	0	
	燧石																																						0	0	
石 器 石皿	燧石																																						0	0	
	磨石																																						0	0	
	燧石片																																						0	0	
	燧石																																						0	0	
加工・使用痕 のあるレキ	燧石																																						0	0	
	磨石																																						0	0	
	燧石片																																						0	0	
	燧石																																						0	0	
レキ	燧石																																						0	0	
	磨石																																						0	0	
	燧石片																																						0	0	
	燧石																																						0	0	
合計			23	19		5		6	10	3	6	10	3	6	0		0		0		0		0		0													45	14		

V章 遺構・包含層出土の遺物

1. 概要

本遺跡の包含層からは、土器1,919点、石器等2,944点、合計4,863点が出土した。これらの出土のあり方を示すため、一次整理で作成した遺物登録台帳を元に、出土点数表・出土分布図を作成した。

出土点数表（表17～19）

土器は、Ⅲ群・Ⅳ群で約98%を占める。他にⅠ群・Ⅴ群・Ⅶ群が数点ずつある。出土層位はすべてⅤ層で、Ⅵ層からの出土はない。Ⅶ群は、沢状地形に一部残存していたⅢ層の出土と判断した。

剥片石器は、石鏃、石槍・ナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、U・Rフレイク、石核、フレイクがある。約99%が黒曜石で、石鏃が最も多く、ついで、U・Rフレイク、スクレイパー、つまみ付きナイフである。礫石器は、砥石、台石・石皿、たたき石、磨製石斧が多い。これらのうち、磨製石斧以外は、遺跡周辺にある砂岩、凝灰岩等の固結の弱い岩石を石材としており、これらは割れやすく点数が多くなる。少量であるが、すり石、北海道式石冠も出土した。石製品はタルク岩製の玉がある。レキは多く出土し、礫石器等の約80%を占める。これらも脆弱な遺跡近くの堆積岩が用いられており、人為的な痕跡がみとめられる加工・使用痕のあるレキが多い。

出土分布図（図15～20）

すべての遺物は、17～19ラインにみられる沢状地形に少なく、これを挟む両側の平坦部や緩斜面部に多く、概して遺物の出土のあり方は、地形と包含層の残存状態に影響を受けている。

土器はM-13・14区とN-15区に多く、これらはⅢ・Ⅳ群土器である。剥片石器は、R-24区が多く、主にフレイクである。また、このグリッドに接するQ-23区、R-23～25区では、石鏃が多く出土した。礫石器やレキで点数が多いものは、概ね広く出土が認められる。磨製石斧はM-14区に多く、石製品の玉はO-15区から1点出土した。

なお、遺構出土の遺物もここでまとめて報告する。

2. 土器

(1) 復原土器（図21 表20～24 図版8）

5個体復原できた。

1は突起部が広く開口し胴部へとゆるやかな曲線の器形で、結束第1種羽状縄文と、半截竹管状工具による押引文・刺突文が整然と施される。2は、開口縁部から曲線的に胴部へ至る器形を呈し、地文は複節で貼付上は半截竹管状工具による刺突文である。3は、わずかに外反する口縁部から曲線的にすばまる器形で、器面はLR縄文と半截竹管状工具による平行沈線文、貼付上は同工具による刺突文と刻みが施される。4はまとまって出土（カラー図版1）し、突起部から胴部下位までが復原できたもので、直立気味の口縁部から底部へと曲線的にすばまる器形である。口唇部近くの外面は粘土貼付により肥厚し、そこに円形の刺突文と小さな粘土塊がある。貼付上は半截竹管状工具による施文で、地文のLR斜行縄文は口縁部の内面にも施される。5は、胴部で器面に地文を施した後、貼付帯が付され、これと器面で羽状縄文になるが、器面の一部はこれらが重複して施されている。

1～4はⅢ群b類の萩ヶ岡3式、5はⅣ群a類の余市式である。

表17 包含層出土土器点数表

遺物種別 / 層位					遺物種別 / 層位									
時期	土器		V層	Ⅲ層	I層	合計	時期	土器		V層	Ⅲ層	I層	合計	
	部位	残存状態						部位	残存状態					
I群	複数部位					0	V群	複数部位					0	
	口縁部	良好				0		口縁部	良好	4				4
		剥離				0			剥離					0
		磨耗	0	0	0	0			磨耗	4	0	0	0	4
		小破片				0			小破片					0
	底部	良好				0		底部	良好					0
		剥離	0	0	0	0			剥離	0	0	0	0	
		磨耗				0			磨耗					0
		小破片				0			小破片					0
	胴部	良好	6			6		胴部	良好	1				1
		剥離				0			剥離	2	3	0	0	3
		磨耗	6	0	1	1			磨耗					0
		小破片				0			小破片					0
	不明	良好				0		不明	良好					0
		剥離	0	0	0	0			剥離	0	0	0	0	
		磨耗				0			磨耗					0
小破片					0	小破片						0		
小計		6	0	1	7	小計		7	0	0	7			
複数部位					0	複数部位					0			
口縁部	良好	67			67	口縁部	良好					0		
	剥離	8			8		剥離					0		
	磨耗	3	84	0	0		3	磨耗	0	0	0	0		
	小破片	6			6		小破片					0		
底部	良好	12			12	底部	良好					0		
	剥離	3	17	0	0		3	剥離	0	0	0	0		
	磨耗	1			1		磨耗					0		
	小破片	1			1		小破片					0		
胴部	良好	421		2	423	胴部	良好		2			2		
	剥離	161		2	161		剥離	0	2	0	0	2		
	磨耗	18	834	0	2		18	磨耗				0		
	小破片	234			234		小破片					0		
不明	良好				0	不明	良好					0		
	剥離	0	0	0	0		剥離	0	0	0	0			
	磨耗				0		磨耗					0		
	小破片				0		小破片					0		
小計		935	0	2	937	小計		0	2	0	2			
複数部位					0	複数部位					0			
口縁部	良好	12			12	口縁部	良好	3				3		
	剥離	12	28	0	0		12	剥離		4	0	0	4	
	磨耗				0		磨耗					0		
	小破片	4			4		小破片	1				1		
底部	良好	2			2	底部	良好					0		
	剥離	8	11	0	0		8	剥離	0	0	0	0		
	磨耗	1			1		磨耗					0		
	小破片				0		小破片					0		
胴部	良好	143		12	155	胴部	良好	8				8		
	剥離	231		14	245		剥離	2	17	0	0	2		
	磨耗	6	873	0	1		7	磨耗				1		
	小破片	493		6	499		小破片	6				6		
不明	良好				0	不明	良好					0		
	剥離	0	0	0	0		剥離	0	0	0	0			
	磨耗				0		磨耗					0		
	小破片				0		小破片					0		
小計		912	0	33	945	小計		21	0	0	21			
						合計					1,881	2	36	1,919

表18 包含層出土剥片石器点数表

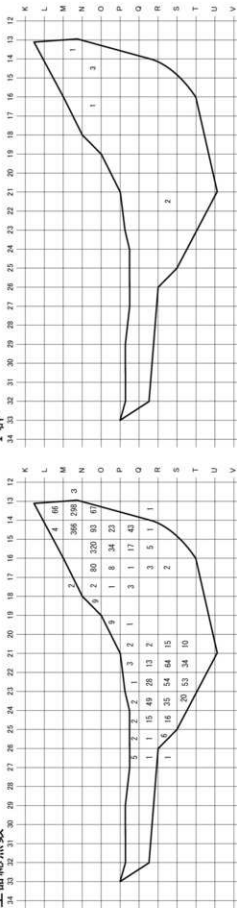
器種	器種名・分類 / 層位		V層	I層	合計
	残存状態	岩石			
石鏃	完形	黒曜石	28		28
	準完形	黒曜石	12	1	12
	半形	黒曜石	8		8
石槍・ナイフ	完形	黒曜石	10		10
	準完形	黒曜石	2		2
	半形	黒曜石	1	0	0
石鏃	完形	黒曜石	1		1
	準完形	—		0	0
	半形	—		0	0
つまみ付きナイフ	完形	黒曜石	2		2
	準完形	黒曜石	2	0	2
	半形	黒曜石	1		1
スクレイパー	完形	黒曜石	5		5
	準完形	黒曜石	2		2
	半形	黒曜石	2		2
U・Rフレイク	完形	黒曜石	29		29
	準完形	黒曜石	1	0	1
	半形	黒曜石	1		1
石核	完形	黒曜石	4	0	4
	準完形	黒曜石	1		1
	半形	黒曜石	1		1
フレイク	完形	黒曜石	1,123	2	1,125
	準完形	黒曜石	3	2	3
	半形	黒曜石	3		3
合計		1,254	3	1,257	

表19 包含層出土礫石器・石製品・レキ点数表

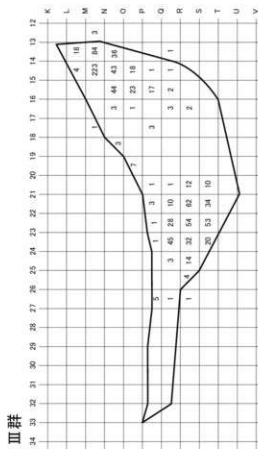
器種	器種名・分類 / 層位		V層	I層	合計		
	残存状態	岩石					
磨製石斧	完形	緑色泥岩	10		10		
	準完形	片岩	3		3		
		片岩	3		3		
	半形	緑色泥岩	1	0	1		
		緑色泥岩	8		8		
	たつき石	完形	砂岩	22		22	
		準完形	凝灰岩	13		13	
			礫岩	2		2	
		半形	礫岩	1		1	
			砂岩	1	1	0	
すり石		完形	砂岩	1		1	
		準完形	—		0	0	
		片	砂岩	18	1	19	
			凝灰岩	7		7	
		北海道式石冠	完形	凝灰岩	1		1
	準完形		—		0	0	
	片		砂岩	1		1	
			砂岩	1		1	
	礫石		完形	—		0	0
			準完形	—		0	0
砂岩				1		1	
片			砂岩	71		71	
			凝灰岩	44		44	
台石皿			完形	砂岩	10		10
		準完形	—		0	0	
			砂岩	55	0	55	
		片	凝灰岩	18		18	
			礫岩	3		3	
	合計		331	1	332		
	石製品	完形	タルク岩	1		1	
		準完形	—		0	0	
		半形	—		0	0	
	加工・使用痕のあるレキ	完形	砂岩	13		13	
片		凝灰岩	5		5		
		片麻岩	1		1		
片		砂岩	230	4	234		
		凝灰岩	56		56		
—		片岩	2		2		
		チャート	3		3		
レキ		完形	砂岩	74		74	
		片	凝灰岩	38		38	
			泥岩	4		4	
	片	礫岩	4		4		
		火山礫	1		1		
	片	チャート	2		2		
		花崗岩	2		2		
	片	片麻岩	1	0	1		
		砂岩	2		2		
	片	砂岩	723		723		
凝灰岩		170		170			
片	泥岩	1		1			
	礫岩	8		8			
片	玄武岩	1		1			
	花崗岩	1		1			
合計		1,350	4	1,354			
総合計		1,682	5	1,687			

土器総点数

I群



III群



IV群

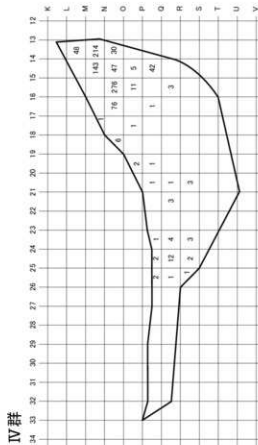


図15 包含層遺物出土分布図(1)

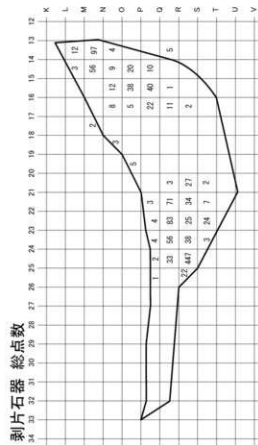
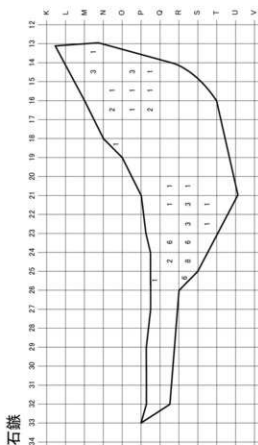
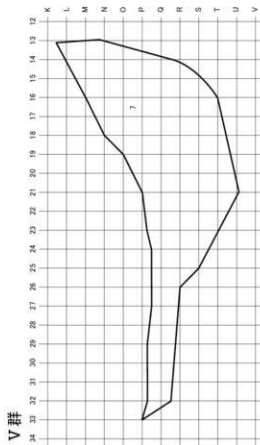
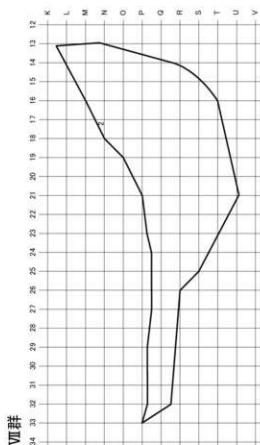
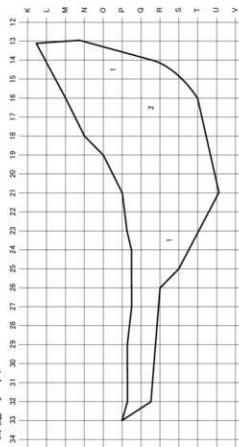
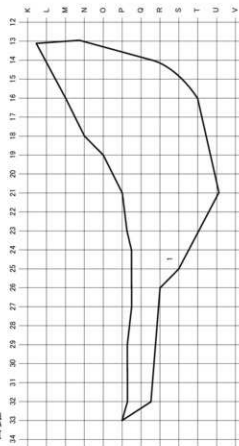


図16 包含層遺物出土分布図(2)

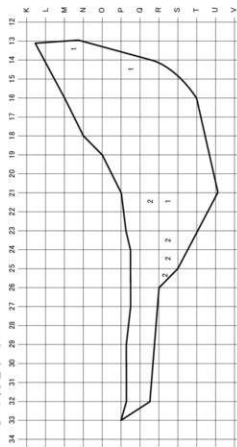
石槍・ナイフ



石錐



つまみ付きナイフ



スクレイパー

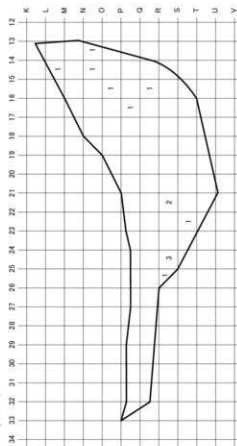
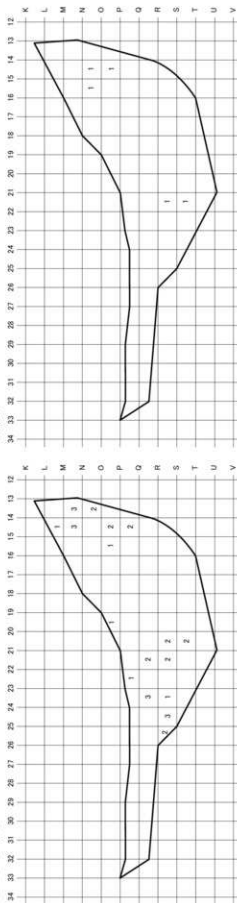
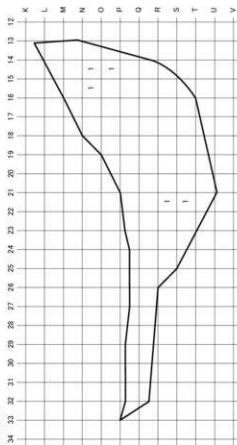


図17 包層遺物出土分布図(3)

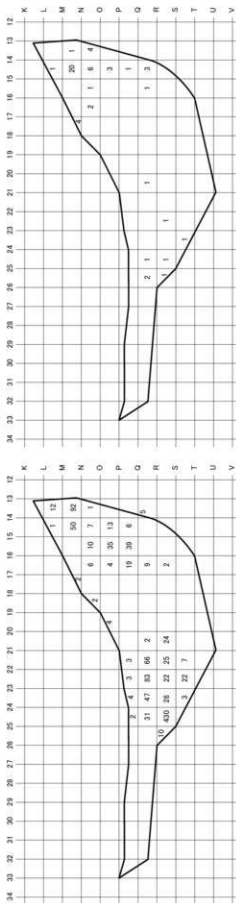
U・Rフレイク



石核



フレイク



磨製石斧

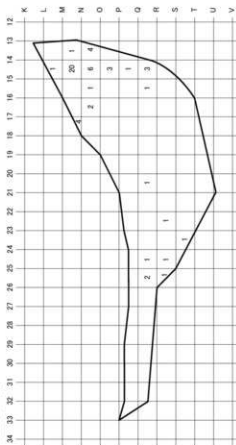
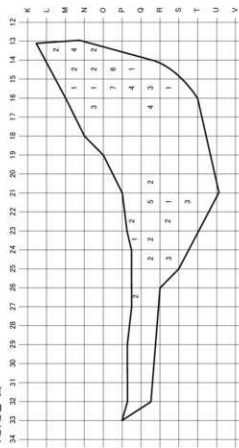
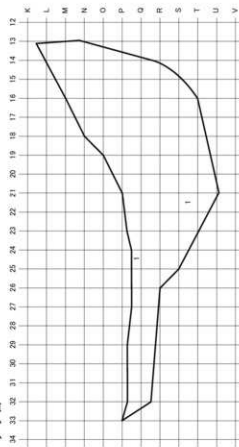


図18 包含層遺物出土分布図(4)

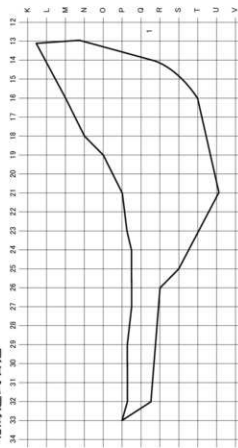
たたき石



すり石



北海道式石冠



砥石

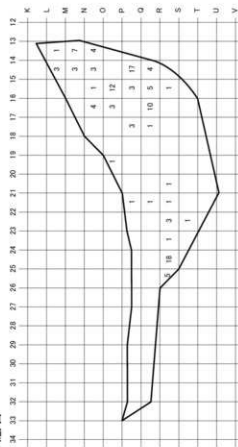
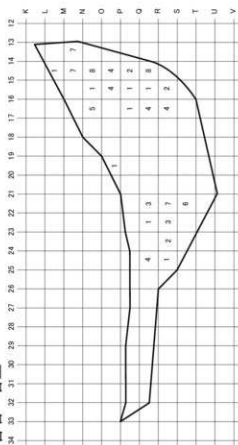
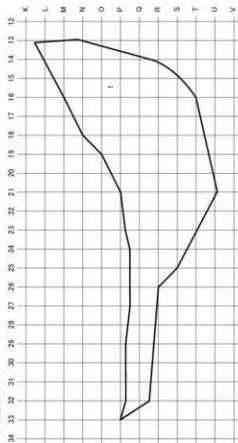


図19 包層遺物出土分布図(5)

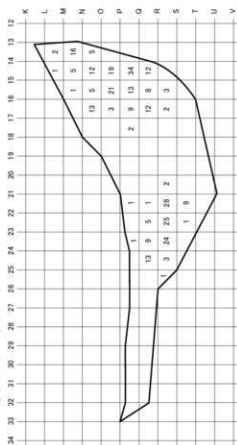
台石・石皿



石製品(玉)



加工・使用痕のあるレキ



レキ(自然礫)

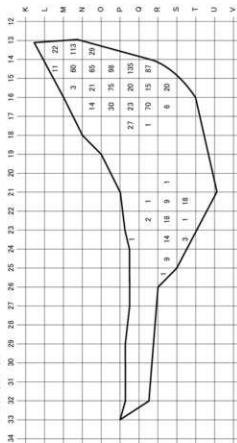


図20 包含層遺物出土分布図(6)

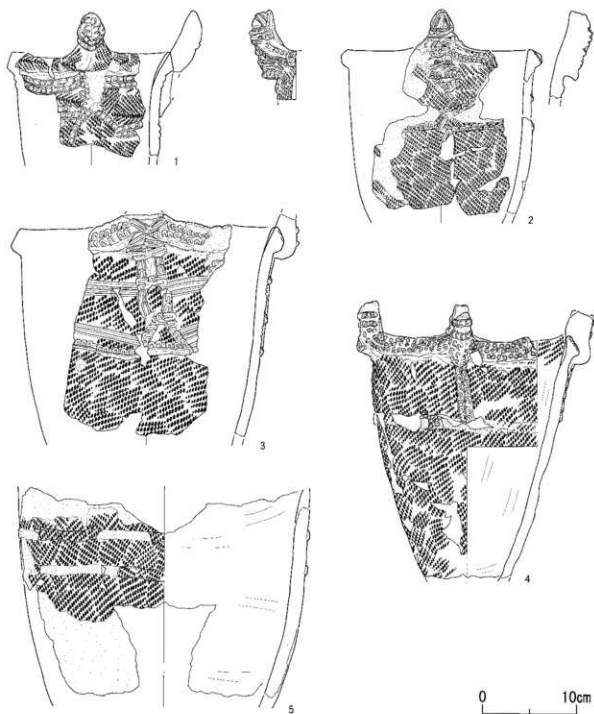


圖21 包含層出土 復原土器

(2) 破片土器

遺構出土 (図22 表25 図版8・9)

1・2はP-2出土で織織の有無から、前者はⅢ群b類、後者はⅣ群a類と判断する。3はT P-2出土で、撚りの異なる原体による羽状縄文がみられる。4はT P-3出土でR L縄文が施される。5はT P-7出土で、三角形に加工された土製品の可能性がある。6はT P-10出土で、半截竹管状工具により施文される。7・8はT P-11出土、7は貼付部分から器面にかけて刺突文が施され、8はL R縄文である。

包含層出土のⅢ群・Ⅳ群土器 (図22~24 表25 図版9~11)

9~27は口縁部である。

9は半截竹管状工具による平行沈線文、刺突文が施される。10の地文は複節で、幅広い沈線文がみられる。11の器面はL R縄文で、貼付部分は押引文と刺突文が施される。12は口唇部が肥厚し、半截竹管状工具による施文である。13は小さな突起部がみられ、口唇部には円形とU字状の刺突文が施される。14は厚手で、半截竹管状工具による施文である。15の地文は条の中に節がみられず、直前段多条と判断される。16は肥厚する口唇部に、刺突文と沈線文が施される。17の外面には粘土塊と平行沈線文がみられる。18は別原体による羽状縄文と沈線文があり、口唇部は平坦に器面調整される。19の器面には押引文、貼付帯には刺突文が観察される。20は突起部で、貼付部分と器面に刺突文が施される。21は内面が剥落し、外面に縦位の縄線文がみられる。22はR L縄文が内外面に施され、胎土に石英を多量に含む。23の口唇部は肥厚し、地文は複節である。24は口唇部と外面の施文は異なる原体と判断される。25はL R原体により、口唇部と内外面に施文される。26は外面と口唇部がL Rで、内面の施文は別原体による。27は外面がL R縄文で、口唇部と内面は無文である。

28・29は底部である。

28は底面で、内外面に不整な凹凸がみられる。29の外面はR L原体による、横走と縦走する縄文である。

30~36は胴部である。

30は、地文が結束第1種羽状縄文、貼付部分は押引文が施される。31はL R縄文地に平行沈線文が観察される。32はR L縄文地にU字状の粘土が貼付けられ、その部分も同原体による施文である。33の地文は結束第1種のL R縄文である。34は、同原体で回転方向を変えて施した羽状縄文と判断される。35はL R縄文で、36はR L原体による斜行・縦走する縄文が施される。

包含層出土のⅠ・Ⅴ・Ⅶ群土器・土製品 (図24 表25 図版11)

37はL・Rの撚紐を用いた矢羽根状の撚糸文が施され、Ⅰ群b類と考えられる。38・39は同一個体で、外面は無文地に曲線的な沈線文、口唇部直下の内面には粘土塊が貼付けられる。Ⅴ群と判断される。40の外面はタテ、内面はタテ・ヨコのミガキが施され、Ⅶ群である。41は全体が不明で土製品と判断した。表裏面は無文で側面に沈線文が施される。

3. 石器等

(1) 剥片石器 (図25 表26 図版11)

遺構出土

1・2はTピット出土で、1は五角形で基部が曲線的な石礫、2はつまみ付きナイフで、左側縁は、腹面には割れ口、背面には二次調整がみられ、破損し生じた割れ口に刃部を再生したと考えられる。

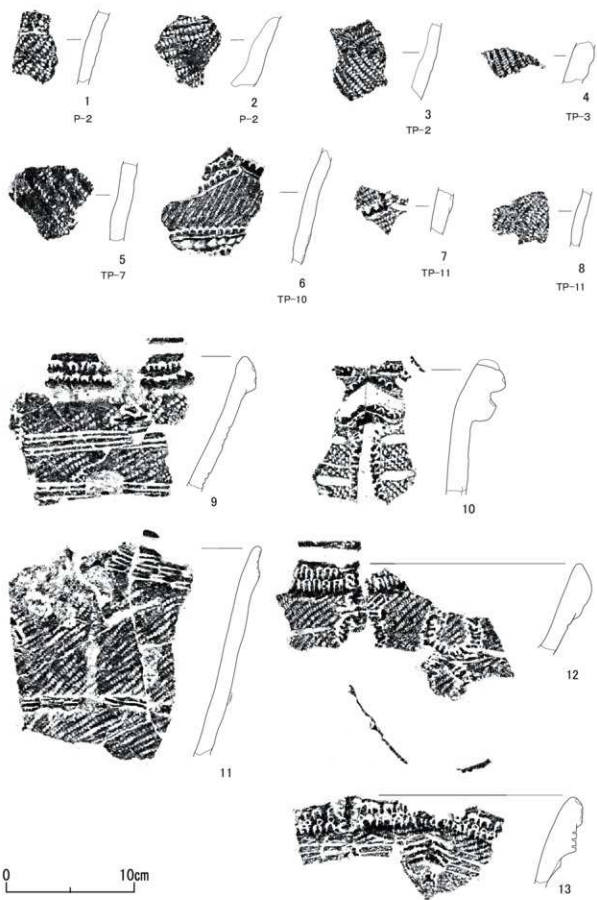


图22 遺構・包含層出土 破片土器

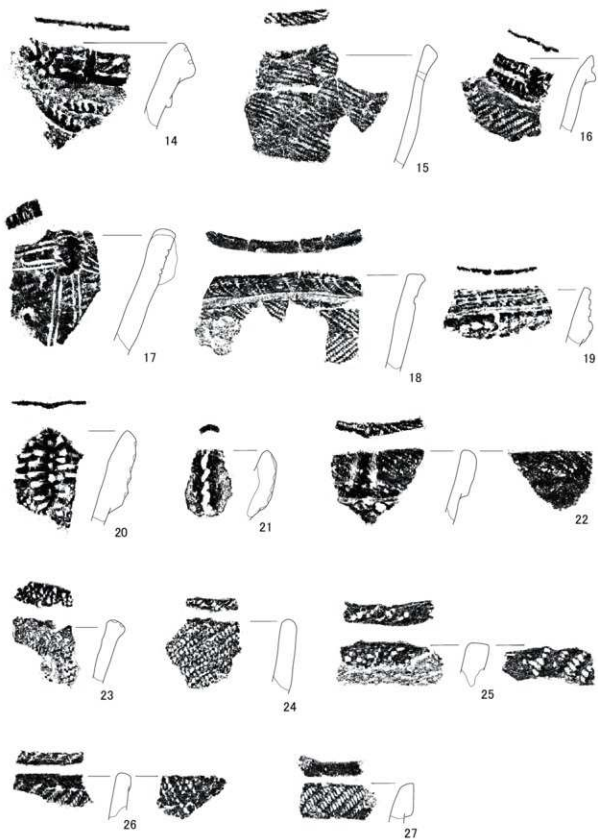


图23 包含層出土 破片土器 (1)

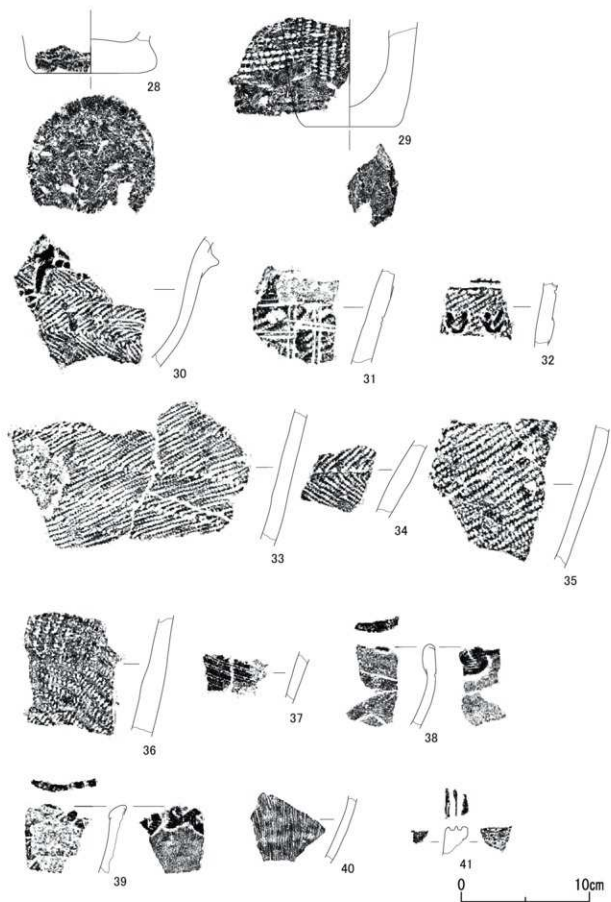


图24 包含层出土 破片土器 (2)

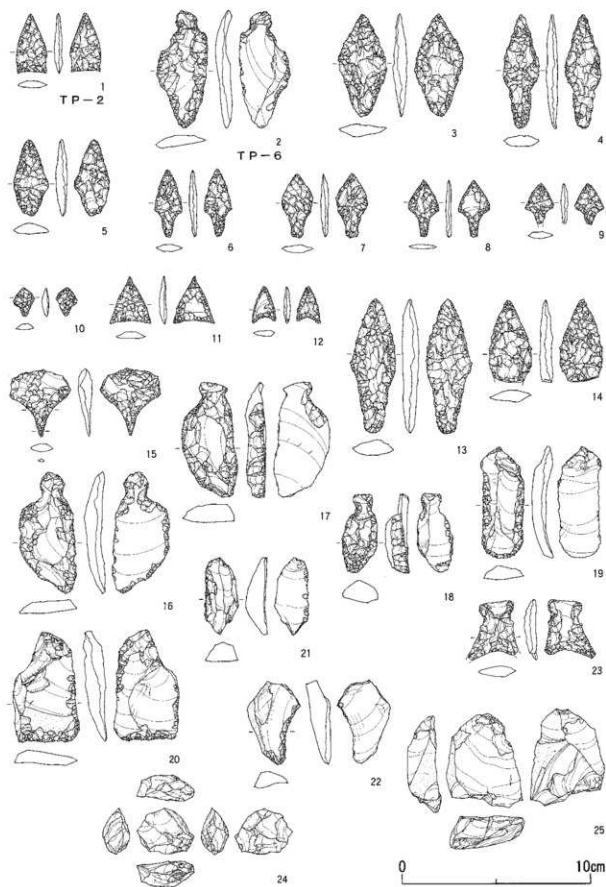


図25 遺構・包含層出土 剥片石器

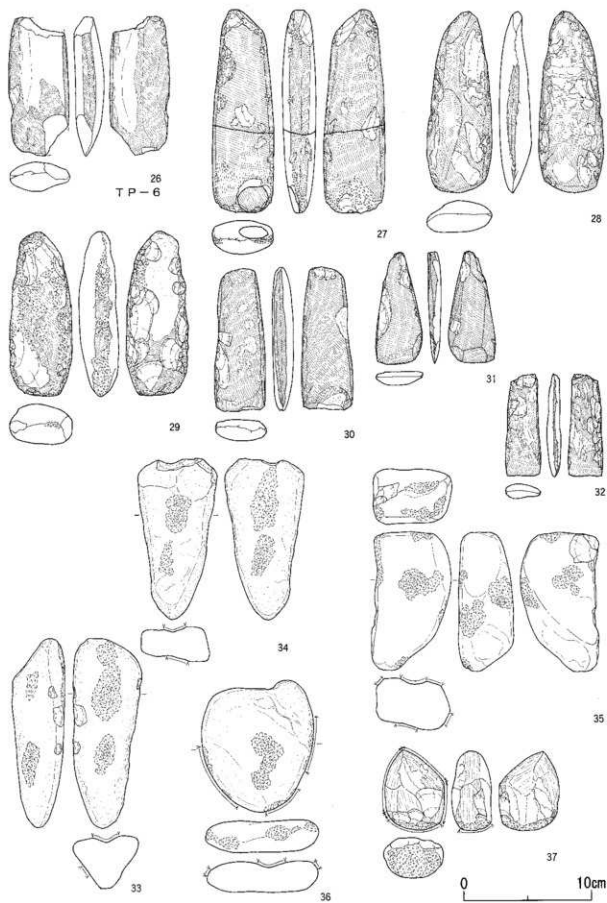


图26 遺構・包含層出土 礫石器 (1)

包含層出土

3～12は黒曜石製の石鏃で、3は幅広く背面の一部に高まりを残す。4は長身で、基部が長い。5は基部と背面左側縁を欠く。6の石材は、小球果が筋状にみられる黒曜石である。7は両側縁が曲線的で、背面左側縁部に大きな剝離痕がみられる。8は有茎で腹面に広く剝離面を残す。9は小型で、基部を破損する。10も小型で大ききの割に厚みがある。11は基部と両側縁が曲線的で、正三角形を呈する。12は二次調整が周縁にみられる。13・14は石槍・ナイフで、13の腹面は種状剝離が顕著、14は基部を破損する。15は石錐で、錐部は両面加工により作出されており、つまみ部の腹面上端部は階段状剝離が複数みられる。16～18はつまみ付きナイフである。16は湾曲する素材剥片を用いている。17は真岩製で厚みがあり、背面周縁に調整が施される。18は小型で厚みがあり、つまみ部分付近は背腹両面に大きな剝離痕がある。19～23はスクレイパーである。19はチャート製で両側縁に刃部があり、つまみ付きナイフを再加工したものかもしれない。20は背腹両面に大きな剝離痕があり、背面右側縁と下端部が二次調整される。21は背面に細長い剝離痕を有し、左側縁に刃部を有する。22は原礫面を残し、背面右側縁部に曲線的な刃部を有する。23は上端側の両側縁に抉りを有し、下端側は二又で尖る先端部が作出される。形状から石製品の可能性が考えられる。24・25は石核で、24は多量的小球果が筋状にみられる黒曜石製で、稜が磨滅する。25は原礫面があり、大きな剝離面が4か所以上観察される。

(2) 礫石器 (図26～28 表26 図版12)**遺構出土**

すべてTピットからの出土である。26は擦り切り手法による磨製石斧で、上端部と刃部の表面右側を破損する。38は凝灰岩製のたたき石で、凹状にくぼむ、たたき痕がみられる。44は台石で、概して平坦な面に一部くぼみがあり、敲打痕と判断した。

包含層出土

27～33は磨製石斧である。27は接合したもので、側面の刃部側に縦方向の研磨痕があり、それ以外は横または斜め方向である。刃部付近には剝離痕とたたき痕が観察される。28は素材の形状を利用し製作されたもので、剝離痕の稜が磨滅する。29は厚みがあり、表面に敲打痕が顕著である。30は表裏面と側面に研磨痕がみられ、刃部と上端部に剝離痕が観察される。31は両側面が研磨加工により平坦で、上端部から刃部へと広がる形状である。32は片岩製で小型のものである。33～37は、たたき石である。33は短軸方向の断面が三角形で、うち2面に凹状のたたき痕がある。34は表裏両面に、凹状の使用痕がある。35の石材は、被熱による赤色味を帯びる。36は扁平で楕円形の礫の平坦面に、たたき痕がみられる。37は中央から下端にかけて、たたき痕が複数あり、それ以外の面は平滑で、自然の礫面が研磨されているか、判断できない。39・40はすり石で、39は下端部に平坦化したすり面が認められ、40は厚みのある楕円形の礫に平坦化した面がみられる。41～43は砥石でいずれも数点が接合した。41は被熱により赤色化している。42・43は同一個体の可能性があり、ともに使用面がゆるやかにくぼむ。45～47は台石である。45は溝状にゆるやかにくぼむ部分を使用痕と考えた。46は細長く厚みのある礫で、凹状の使用痕がみられる。47は薄く大型の石材で、楕円形の平滑でくぼむ使用痕が認められる。

(3) 石製品 (図28 表26 図版12)

48は軟質なタルク岩製の玉で、明瞭な研磨痕は認められず、自然礫を用いたものである。孔は表面よりも裏面からの方が大きい。

(未完)

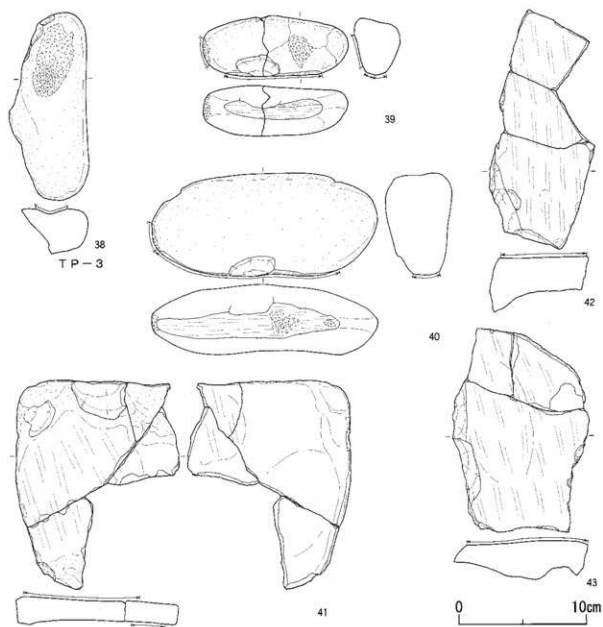


图27 遺構・包含層出土 礫石器 (2)

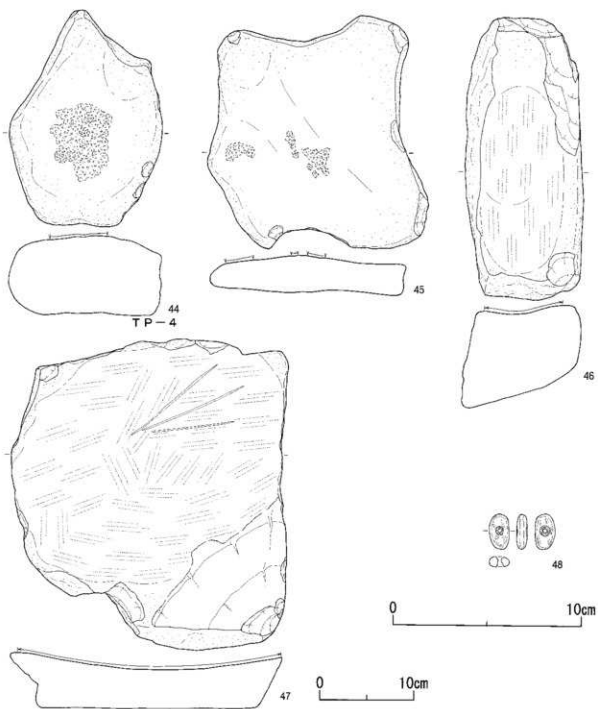


図28 遺構・包含層出土 礫石器(3)・石製品

表20 L-14区出土復原土器観察表

区	番号	図説	出土地点	層位	遺物番号	破片点数	計測値 (cm)			重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)
							器高	口径	口径				
21	1	8	L-140C	V層	—	2	(13.3)	(18.0)	—	500	口径～ 器底1部	深鉢	群形b類 灰夕間式
接合破片 総点数			x				融合・同一器体破片 出土地点・層位・遺物番号 (点数)			・ M-130C・V層①・N-140C・V層①			
物土 (素材)		種類	多量	処理	形状	種類	器体上部	量	少量	備考	石質		
内	文様・調整		色調	使用の痕跡	その他	部位 (残存部)	文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内		
	編付 平織竹管 刺交文・平行文 L.R・H.L 組糸類1種別刺縄文 L.R平織		灰黄褐色 (10196/4)	黒色化	編組孔	突起部 口唇部 (20～30%)	L字ホ 沈没文跡の調整痕	灰黄褐色 (10196/2)	黒色化 炭化物付着	—			
外	編付 平織竹管 刺交文・平行文 L.R・H.L 組糸類1種別刺縄文 L.R平織		褐色 (10197/4)	—	—	口唇部 器底上部 (20～30%)	L字ホ 沈没文跡の調整痕	灰黄褐色 (10196/2)	黒色化	—	外		

表21 N-15区出土復原土器観察表

区	番号	図説	出土地点	層位	遺物番号	破片点数	計測値 (cm)			重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)
							器高	口径	口径				
21	2	8	N-150C	V層	—	7	(21.3)	(21.3)	—	810	口径～ 器底1部	深鉢	群形b類 灰夕間式
接合破片 総点数			7				融合・同一器体破片 出土地点・層位・遺物番号 (点数)			—			
物土 (素材)		種類	多量	処理	形状	種類	器体上部	量	少量	備考	器内縮径の若干 差あり		
内	文様・調整		色調	使用の痕跡	その他	部位 (残存部)	文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内		
	L字ホ		灰黄褐色 (10196/2)	黒色化 炭化物付着	—	突起部 口唇部 (20%)	白濁状 ナブ L字ホ	L字ホ L字ホ	L字ホ L字ホ	黒色化 炭化物付着			—
外	編付 平織竹管 刺交文 H.L.R編文		(黒褐色)	黒色化 炭化物付着	—	口唇部 (20%)	L字ホ	L字ホ	L字ホ	黒色化	—		
高	編付 平織竹管 刺交文 H.L.R編文		灰黄褐色 (10196/4)	黒色化 炭化物付着	—	器底上部 (20%)	L字ホ	L字ホ	L字ホ	黒色化	—		
	編付 平織竹管 刺交文 H.L.R編文		L字ホ・褐色 (10196/4)	黒色化 赤色化 褐色 (10196/4)	—	器底下部 (30%)	L字ホ	L字ホ	L字ホ	黒色化	—		

表22 R-22区出土復原土器観察表

区	番号	図説	出土地点	層位	遺物番号	破片点数	計測値 (cm)			重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)
							器高	口径	口径				
21	3	8	R-220C	V層	—	2	(22.0)	(26.0)	—	1,250	口径～ 器底1部	深鉢	群形b類 灰夕間式
接合破片 総点数			6				融合・同一器体破片 出土地点・層位・遺物番号 (点数)			・ N-225A・V層・(3)			
物土 (素材)		種類	多量	処理	形状	種類	器体上部	量	少量	備考	石質 (白土系)		
内	文様・調整		色調	使用の痕跡	その他	部位 (残存部)	文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内		
	ナブ L字ホ		褐色 (10195/1)	黒色化 炭化物付着	—	口唇部	—	—	—	—			
外	編付 平織竹管 刺交文・平行刺縄文 L.R編文		L字ホ・褐色 (10196/4)	黒色化 炭化物付着	—	口唇部 (20%)	L字ホ 沈没文跡の調整痕	群形褐色 (10195/4)	黒色化	—			
高	編付 平織竹管 刺交文・L字ホ 平行刺縄文 L.R編文		(褐色～ 黒褐色)	黒色化 炭化物付着	—	器底上部 (20%)	L字ホ 沈没文跡の調整痕	L字ホ・褐色 (10195/4)	黒色化	—			
	L.R編文		L字ホ・褐色 (10196/4)	炭化物付着	—	器底下部 (20%)	ナブ 器底の調整痕	(黒褐色)	黒色化 炭化物付着	—			

表23 M-14区出土復原土器観察表

区	遺物 番号	出土地点	層位	遺物 番号	破片 点数	計測値 (mm)			重量 (g)	形状	器種	備考 (分類・型式)	
						縦高	口径	直径					
21	4	8	M-14IX	V層	—	68	(29.3)	25.9	—	1,700	口縁～ 胴部下部	深鉢	群野8型 灰ケ戻式
接合破片 総点数		79	備考・同一器種破片 出土地点・層位・遺物番号 (点数)			組合し(21+22)個体:M-14・V層・16							
土 (土質)		繊維	灰質	粒徑	中～粗粒	種類	胎土主体	量	少量	備考	チャート 表示部位		
区	文様・調整		色調	使用の痕跡	その他	部 位 (残存率)	文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内		
	胎面以降 平飯竹管刺突文 四角刺突文		浅黄褐色 (T, 3199/6)	黒色北	—	黄 緑 部 口 縁 部 (90～100%)	胎面以降 ナズ 1.5系縄文	比201+黄緑 ～褐色 (18197/4 ～5021/6)	—	—			
	胎付 平飯竹管刺突文 1.5系縄文		浅黄褐色 (T, 3199/6)	黒色北 炭化物付着	胎付 跡痕	口 縁 部 (90%)	1.5系縄文	比201+黄褐色 (18197/4)	黒色北 炭化物付着	—			
	胎付 平飯竹管刺突文 1.5系縄文		褐色 (T, 3197/6)	黒色北 炭化物付着	胎付 跡痕	胴部上半 ～底脚 (90～90%)	ミヅキ ナズ 工具のブタリ	浅黄褐色 (T, 3199/6)	黒色北 炭化物付着	—			
区	1.5系縄文		比201+黄褐色 (18197/3)	黒色北 赤色成ナ	—	胴部下半 ～底脚 (90～90%)	ミヅキ	比201+黄褐色 (18197/3)	黒色北	—	外		

表24 N-16区出土復原土器観察表

区	遺物 番号	出土地点	層位	遺物 番号	破片 点数	計測値 (mm)			重量 (g)	形状	器種	備考 (分類・型式)	
						縦高	口径	直径					
21	5	8	N-16IX	V層	—	4	(22.6)	—	—	2,400	胴部中位	深鉢	群野8型 灰ケ戻式
接合破片 総点数		8	備考・同一器種破片 出土地点・層位・遺物番号 (点数)			・N-16IX・1層16							
土 (土質)		繊維	なし	粒徑	中粒	種類	胎土主体	量	極少量	備考	石質 右色灰物		
区	文様・調整		色調	使用の痕跡	その他	部 位 (残存率)	文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内		
	胎付等 1.5系・1.1系 四角刺突文		比201+黄褐色 (18197/3)	黒色北 炭化物付着	胎付等 跡痕 器面 跡痕	胴部中位 (80%)	ナズ	褐色 (T, 3199/6)	黒色北	—		外	

表25 遺構・包含層出土 破片土器観察表(1)

層	番号	図面	出土地点	層位	遺物 番号	破片数		破片部位	重量 (g)	形状	分類		備考 (土器型式)
						小計	合計				器身	口縁	
新土(遺和群)													
種類		形状	理由	外底	内底	(器底)		外底	内底	使用の痕跡			
22	1	8	P-2	遺土1	—	1	1	胴部	23.1	円筒	磨跡b層	—	—
中多量	中一層位	磨石・灰物 土にあり	土質調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
22	2	8	P-2	遺土1	—	1	1	胴部	35.4	円筒	磨跡a層	—	内面磨跡
中七	層位	磨石土塊 土にあり	土質調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
22	3	8	T-P-2	遺土1	—	1	1	胴部	33.1	円筒	磨跡a層	—	内面磨跡
中七	層位	磨石土塊 (黄色・白色)	土質調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
22	4	8	T-P-3	遺土3	—	1	1	胴部	18.7	円筒	磨跡a層	—	—
中七	層位	磨石・灰物 土にあり	土質調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
22	5	8	T-P-7	遺土1	—	1	1	胴部	41.3	円筒	磨跡a層	—	土器面? 二角形
中七	層位	磨石土塊 土にあり	土質調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
22	6	9	T-P-10	遺土1	—	1	1	胴部	86.9	円筒	磨跡b層	—	底平式
中多量	中位	磨石・土質調査 (白色粉砕・多量)	土質調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
22	7	9	T-P-11	遺土1	—	1	1	胴部	16.6	円筒	磨跡b層	—	底平式
中多量	層位	磨石土塊 (黄色粉砕)	土質調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
22	8	9	T-P-11	遺土1	—	1	1	胴部	17.1	円筒	磨跡b層	—	—
中多量	中一層位	磨石土塊	土質調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
22	9	9	Q-21区 V層	—	—	2	2	口縁部 (器底)	106.8	円筒	磨跡b層	—	底平式
中多量	層位	磨石土塊 (黄色粉砕)	土質調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
22	10	9	Q-22区 V層	—	—	2	2	口縁部 (器底)	86.1	円筒	磨跡b層	—	底平式
中多量	層一層位	磨石・灰物 土にあり	土質調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
22	11	9	R-21区 V層	—	—	6	6	口縁一層位	278.9	円筒	磨跡b層	—	底平式
中多量	層一層位	磨石・灰物 土にあり	土質調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
22	12	9	M-12区 N-12区 V層	—	—	2	2	口縁一層位	81.0	円筒	磨跡b層	—	底平式
中多量	中一層位	磨石・灰物 土にあり (黄色粉砕)	土質調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
22	13	9	R-21区 V層	—	—	2	2	口縁部	114.1	円筒	磨跡b層	—	底平式
中多量	層一層位	磨石土塊 土にあり	土質調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
23	14	9	N-14区 V層	—	—	1	1	口縁部	108.9	円筒	磨跡b層	—	底平式
中多量	中位	磨石・灰物 土にあり (多量)	土質調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
23	15	9	R-21区 V層	—	—	3	3	口縁部	74.9	円筒	磨跡b層	—	底平式
中多量	層一層位	磨石・灰物 土にあり	土質調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
23	16	9	R-22区 V層	—	—	1	1	口縁部	65.2	円筒	磨跡b層	—	底平式
中多量	中位	磨石・灰物 土にあり (多量)	土質調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
23	17	9	P-15区 V層	—	—	1	1	口縁部	100.2	円筒	磨跡b層	—	底平式
少一中量	中位	磨石土塊 (黄色粉砕)	土質調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
23	18	9	Q-14区 V層	—	—	3	3	口縁一層位	119.3	円筒	磨跡b層	—	底平式
少量	中一層位	磨石土塊 (黄色)	土質調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
23	19	10	Q-22区 Q-23区 V層	—	—	1	2	口縁部	86.5	円筒	磨跡b層	—	底平式
中量	中位	磨石・灰物 土にあり	土質調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
23	20	10	Q-24区 V層	—	—	1	1	口縁部 (器底)	41.8	円筒	磨跡b層	—	底平式
中七	中位	磨石土塊 (黄色粉砕)	土質調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

表25 遺構・包含層出土 破片土器観察表(2)

層	番号	段階	出土地点	層位	遺物番号	破片形状		破片部位	重量(g)	器種	分類	備考(土器型式)		
						小片	合計							
新土(遺和財)														
種類						文様・装型			色調			使用の痕跡		
						外面	内面	(器底)	外面	内面	外面	内面		
23	21	10	M-13区	V層	—	1	1	口縁部	18.1	陶器	蓋の土版	内面内面		
なし	観察	陶器	器底・器物 土にあり (石若 多量)	脇付	ナゲ	(口縁部)	(口縁部)	口縁部	18.1	陶器	蓋の土版	—		
23	22	10	M-13区	V層	—	1	1	口縁部	40.9	陶器	蓋の土版	瓶木筒式		
多量	観察	陶器	器底・器物 土にあり (石若 多量)	脇付 耳土縄文 片取部交叉	耳土縄文 ナゲ	(口縁部)	(口縁部)	(口縁部)	40.9	陶器	蓋の土版	瓶木筒式 黄色化 炭化跡付着		
23	23	10	S-23区	V層	—	1	1	口縁部	39.3	陶器	蓋の土版	瓶木筒式		
多→中量	観察	陶器	器底・器物 土にあり (石若)	耳土縄文	ナゲ	(口縁部)	(口縁部)	(口縁部)	39.3	陶器	蓋の土版	—		
23	24	10	P-19区	V層	—	1	1	口縁部	43.4	陶器	蓋の土版	—		
なし	観察	中→陶器	器底・器物 土にあり (石若 多量)	耳土縄文	ナゲ	(口縁部)	(口縁部)	(口縁部)	43.4	陶器	蓋の土版	黄色化		
23	25	10	N-14区	V層	—	1	1	口縁部	40.9	陶器	蓋の土版	外面1/2割断		
なし	観察	陶器	器物土片 (石若 多量)	耳土縄文	耳土縄文 ナゲ	(口縁部)	(口縁部)	(口縁部)	40.9	陶器	蓋の土版	黄色化		
23	26	10	M-13区	V層	—	1	1	口縁部	24.4	陶器	蓋の土版	—		
なし	観察	陶器	器物土片 (石若 多量)	耳土縄文	耳土縄文 ナゲ	(口縁部)	(口縁部)	(口縁部)	24.4	陶器	蓋の土版	黄色化		
23	27	10	L-13区	V層	—	1	1	口縁部	32.9	陶器	蓋の土版	—		
なし	観察	陶器	器物土片 (石若 多量)	脇付 耳土縄文	ナゲ	(口縁部)	(口縁部)	(口縁部)	32.9	陶器	蓋の土版	黄色化		
24	28	10	S-20区	V層	—	1	1	底面 (器底)	279.1	陶器	蓋の土版	瓶木筒式		
多量	中→観察	陶器	器底・器物 土にあり (石若)	耳土縄文 ナゲ	ナゲ (平盤内底)	(口縁部)	(口縁部)	(口縁部)	279.1	陶器	蓋の土版	瓶木筒式		
24	29	10	O-15区	V層	—	1	1	胴部下部 ~底面	240.8	陶器	蓋の土版	—		
なし	観察	陶器	器物土片 (石若 多量)	耳土縄文 横糸・縦糸	ナゲ	(口縁部)	(口縁部)	(口縁部)	240.8	陶器	蓋の土版	黄色化		
24	30	10	M-14区 N-14区	V層	—	1 1	2	胴部	94.9	陶器	蓋の土版	瓶木筒式		
多量	観察	陶器	器物土片 (石若 多量)	脇付 耳土縄文 片取部交叉	ナゲ 耳土縄文 片取部交叉の遺型	(口縁部)	(口縁部)	(口縁部)	94.9	陶器	蓋の土版	黄色化 黄色化?		
24	31	10	P-19区	V層	—	1	1	胴部	94.9	陶器	蓋の土版	瓶木筒式		
少量	中→観察	陶器	器底・器物 土にあり (石若 多量)	耳土縄文 片取部交叉	ナゲ	(口縁部)	(口縁部)	(口縁部)	94.9	陶器	蓋の土版	炭化跡付着		
24	32	10	R-20区	V層	—	1	1	胴部	46.4	陶器	蓋の土版	—		
多量	中	陶器	器底・器物 土にあり (石若 多量)	脇付 耳土縄文 横糸 片取部交叉	ナゲ 片取部交叉の遺型	(口縁部)	(口縁部)	(口縁部)	46.4	陶器	蓋の土版	黄色化 炭化跡付着		
24	33	10	R-23区	V層	—	3	3	胴部	293.8	陶器	蓋の土版	瓶木筒式		
中→多量	中→観察	陶器	器底・器物 土にあり (石若 多量)	耳土縄文 縦糸・横糸同軸	ナゲ 工具の平片	(口縁部)	(口縁部)	(口縁部)	293.8	陶器	蓋の土版	黄色化 炭化跡付着		
24	34	10	O-15区	V層	—	1	1	胴部	49.0	陶器	蓋の土版	—		
中→多量	中	陶器	器物土片 (石若 多量)	耳土縄文	ナゲ	(口縁部)	(口縁部)	(口縁部)	49.0	陶器	蓋の土版	黄色化		
24	35	10	S-23区	V層	—	3	3	胴部	114.4	陶器	蓋の土版	—		
多量	観察	陶器	器物土片 (石若 多量)	耳土縄文	耳土縄文 片取部交叉の遺型	(口縁部)	(口縁部)	(口縁部)	114.4	陶器	蓋の土版	黄色化 炭化跡付着		
24	36	11	N-14区	V層	—	1	1	胴部	140.4	陶器	蓋の土版	—		
なし	観察	陶器	器物土片 (石若 多量)	耳土縄文 横糸・縦糸	ナゲ	(口縁部)	(口縁部)	(口縁部)	140.4	陶器	蓋の土版	—		
24	37	11	N-14区	V層	—	2	2	胴部	16.0	陶器	土の土版	瓶木筒式		
なし	観察	陶器	器物土片	耳土縄文	ナゲ	(口縁部)	(口縁部)	(口縁部)	16.0	陶器	土の土版	黄色化		
24	38	11	R-23区 R-22区	V層	—	1 1	2	口縁部	25.5	陶器	V群	39→同一体		
なし	観察	陶器	器物土片 (石若 多量)	片取部交叉	脇付 片取部交叉	(口縁部)	(口縁部)	(口縁部)	25.5	陶器	V群	黄色化 炭化跡付着		
24	39	11	R-20区	V層	—	1	1	口縁部	26.9	陶器	V群	39→同一体 外面割断		
なし	観察	陶器	器物土片 (石若)	片取部交叉	脇付 片取部交叉	(口縁部)	(口縁部)	(口縁部)	26.9	陶器	V群	—		
24	40	11	N-17区	V層	—	1	1	胴部	23.1	陶器	雑	雑		
なし	観察	陶器	器底・器物 土にあり (石若 多量)	片取部交叉	ナゲ	(口縁部)	(口縁部)	(口縁部)	23.1	陶器	雑	黄色化 炭化跡付着		
24	41	11	R-23区	V層	—	1	1	土製品?	5.9	—	—	黄色化 炭化跡付着		
なし	観察	陶器	器物土片 (石若)	片取部交叉	ナゲ	(口縁部)	(口縁部)	(口縁部)	5.9	—	—	黄色化 炭化跡付着		

表26 遺構・包含層出土 石器等観察表

調査 番号	遺構 番号	出土地点	層位	遺物 番号	器種	計測値 (cm)		重量 (g)	石材	特徴	製作 状態	特徴 観察事項	備考			
						長さ	幅・厚さ									
25	1	T P-6	覆土	—	石鏃	5.1	1.6	6.4	1.6	黒曜石	—	完成	—	—		
25	2	T P-6	覆土	—	つまみ付きナイフ	6.2	2.7	6.9	8.4	黒曜石	—	完成	左側縁下面 破損後 刃部再加工	—		
25	26	T P-6	覆土	—	磨製石斧	(10.9)	4.6	2.4	170.8	緑色泥岩	オリープ灰色 2.5G2/1	準完成	磨り切り 研磨痕	—		
27	38	T P-3	覆土1	—	たたき石	14.7	6.3	3.8	360	凝灰岩	灰黄色 2.5Y7/2	完成	凹状のたたき痕	—		
28	44	T P-4	覆土	—	台石	23.0	16.1	8.5	3,880	砂岩	灰黄色 2.5Y5/1	完成	多数のくぼみ	—		
28	3	P-14IX	V層	—	石鏃	5.4	2.5	6.7	6.4	黒曜石	—	—	完成	—		
25	4	M-14IX	V層	—	石鏃	6.0	1.9	6.6	5.0	黒曜石	—	—	完成	基部両側縁 わずかに抉り		
25	5	R-25IX	V層	—	石鏃	4.0	1.8	6.6	3.0	黒曜石	—	—	完成	基部・背面左側縁 一部欠損		
25	6	R-22IX	V層	—	石鏃	3.5	1.4	6.4	1.4	黒曜石	小球英 粒状	—	完成	—		
25	7	M-14IX	V層	—	石鏃	3.3	1.6	6.4	1.6	黒曜石	—	—	完成	背面左側縁 一部、破損		
25	8	R-23IX	V層	—	石鏃	3.0	1.6	6.3	1.0	黒曜石	—	—	完成	断面に 広い割離面		
25	9	O-15IX	V層	—	石鏃	(2.1)	1.5	6.3	6.7	黒曜石	—	—	完成	小型 基部破損		
25	10	N-19IX	V層	—	石鏃	1.5	1.1	6.4	6.4	黒曜石	—	—	完成	小型		
25	11	N-18IX	V層	—	石鏃	2.5	2.2	6.4	1.2	黒曜石	—	—	完成	断面に 広い割離面		
25	12	R-21IX	V層	—	石鏃	1.9	1.3	6.3	6.6	黒曜石	小球英	—	完成	背面両面に割離面		
25	13	O-14IX	V層	—	石鏃・ナイフ	7.1	2.4	6.9	11.5	黒曜石	—	—	完成	—		
25	14	Q-16IX	V層	—	石鏃・ナイフ	(4.2)	2.3	6.7	5.6	黒曜石	—	—	完成	基部		
25	15	R-24IX	V層	—	石鏃	3.5	3.2	6.7	4.6	黒曜石	—	—	完成	断面上部部に 階段状割離		
25	16	Q-21IX	V層	—	つまみ付きナイフ	6.4	3.0	1.1	13.6	黒曜石	(製肌状)	—	完成	背面片面加工	被熱	
25	17	M-13IX	V層	—	つまみ付きナイフ	6.1	3.0	1.1	20.1	頁岩	灰黄褐色 10YR6/2	—	完成	背面片面加工	—	
25	18	P-14IX	V層	—	つまみ付きナイフ	4.2	1.9	1.2	8.0	黒曜石	—	—	準完成	小型 つまみ部付近 背面両面 剥落痕	被熱?	
25	19	N-14IX	V層	—	スクレイパー	5.9	2.3	1.1	11.5	チャート	灰褐～緑灰色 8Y5/2～4/1	—	完成	背面 両面に調整	—	
25	20	R-24IX	V層	—	スクレイパー	5.8	3.5	1.2	15.8	黒曜石	原礫面	—	準完成	断面右側縁 上部部に片剥	—	
25	21	L-14IX	V層	—	スクレイパー	4.0	1.8	1.2	6.5	黒曜石	—	—	完成	背面左側縁に片剥	—	
25	22	Q-15IX	V層	—	スクレイパー	4.4	2.8	1.2	7.8	黒曜石	赤色部分 原礫面	—	完成	曲線的な片剥	—	
25	23	R-25IX	V層	—	スクレイパー	3.2	2.7	6.7	3.7	黒曜石	(製肌状)	—	準完成	—	—	
25	24	N-14IX	V層	—	石鏃	2.4	3.0	1.4	7.8	黒曜石	小球英 多量 粒状	—	—	完成	つまみ部・ 側縁面 合計 8以上	被熱 石製品?
25	25	N-15IX	V層	—	石鏃	5.1	4.0	1.7	25.4	黒曜石	原礫面	—	—	完成	側縁面 合計 4以上	—
26	27	M-17IX	V層	—	磨製石斧	15.9	4.8	2.7	350	緑色泥岩	緑灰色 7.5G16/1	—	完成	研磨痕 たたき痕	3点接合	
26	28	Q-25IX	V層	—	磨製石斧	14.2	5.1	2.6	222.1	片岩	青灰色 9B5/1	—	完成	研磨痕 剥落痕	—	
26	29	Q-25IX	V層	—	磨製石斧	12.9	4.9	3.1	276.5	片岩	青灰色 5B6/1	—	完成	研磨痕 敲打痕 剥落痕	—	
26	30	N-13IX	V層	—	磨製石斧	11.3	4.0	1.7	124.0	片岩	緑色泥岩 5G7/1	—	完成	研磨痕 剥落痕	—	
26	31	R-24IX	V層	—	磨製石斧	8.8	3.7	1.0	43.6	片岩	緑灰色 7.5G16/1	—	完成	研磨痕 剥落痕	—	
26	32	N-13IX	V層	—	磨製石斧	8.0	2.8	1.1	34.8	片岩	緑灰色 5B4/1	—	完成	小型 研磨痕	—	
26	33	Q-23IX	V層	—	たたき石	14.9	5.5	4.2	297.7	砂岩	灰黄色 2.5Y7/2	—	完成	凹状のたたき痕	被熱	
26	34	S-21IX	V層	—	たたき石	12.7	6.3	2.7	240.1	砂岩	黄灰色 2.5Y6/1	—	完成	凹状のたたき痕	被熱	
26	35	N-14IX	V層	—	たたき石	10.9	6.2	4.3	340	砂岩	にぶい黄褐色 10YR7/3	—	完成	凹状のたたき痕	被熱	
26	36	N-16IX	V層	—	たたき石	16.1	9.0	2.6	286.7	砂岩	暗灰黄色 2.5Y5/2	—	完成	凹状のたたき痕	—	
26	37	Q-16IX	V層	—	たたき石	6.3	4.7	3.1	98.6	凝灰岩	灰黄色 2.5Y6/2	—	完成	たたき痕 平直な断面	—	
27	39	Q-21IX	V層	—	すり石	4.7	11.5	4.0	236.9	凝灰岩	淡黄色 2.5Y7/3	—	完成	すり面 たたき痕	—	
27	40	S-21IX	V層	—	すり石	8.1	17.9	5.6	1,160	凝灰岩	にぶい黄褐色 10YR7/4	—	完成	すり面	被熱?	
27	41	O-15IX	V層	—	砥石	16.5	13.0	2.3	420	砂岩	にぶい黄褐色 10YR7/2	—	片	砥面	被熱 4点接合	
27	42	P-17IX	V層	—	砥石	18.8	8.4	4.3	540	砂岩 凝灰岩	灰黄色 2.5Y6/2	—	片	砥面	3点接合	
27	43	O-16IX	V層	—	砥石	16.1	11.1	3.6	640	凝灰岩	灰黄色 2.5Y6/2	—	片	砥面	3点接合	
28	45	M-14IX	V層	—	台石・石皿	24.6	23.3	4.1	2,750	砂岩	2.5Y5/1 黄灰色	—	完成	すり面?	—	
28	46	O-14IX	V層	—	台石・石皿	30.0	12.5	10.8	5,300	砂岩	2.5Y6/1 黄灰色	—	完成	凹状のすり面	—	
28	47	P-16IX	V層	—	台石・石皿	32.9	29.2	6.9	8,200	凝灰岩	2.5Y7/2 灰黄色	—	片	凹状のすり面	—	
28	48	O-15IX	V層	—	玉	1.8	1.1	0.6	1.7	タルク岩	灰オリープ色 7.5Y6/2 軟質	—	完成	穿孔	—	

VI章 まとめ

1. 概要

本遺跡は、出土土器から縄文時代中期後半～後期前半が主たる時期と判断され、土坑やTピットもこの時期と考えられる。土坑P-1は規模や形態からTピットである可能性があり、P-2は下位部分に解釈しがたい土層の状況がみられ、古い時期の攪乱または風倒木痕等を切って構築されたと推測される。Tピットは、平面形態で分けると、楕円形～長楕円形のもがP-1、T P-1～7・10・11の10基、溝状で細長いものは、重複するT P-8・9の2基である。

Tピットの多くから、礫石器・レキ（自然礫）が多く出土し、包含層からも多数出土した。これらが出土していない遺構は、T P-1・6～9・11で、さらに遺物が全く出土していないものは、T P-1・8・9である。Tピットの性格を考えると、その出土の遺物は、遺構が埋没する過程で周囲の包含層から流れ込んだといえる。このことから、T P-1・8・9が構築された時期は、周辺で礫石器やレキがさほど多く存在しなかった時期があると仮定すると、Tピットの覆土出土の遺物の有無・種別から、Tピットの時期差を推測することができる。すなわち、本遺跡の礫石器・レキが、縄文時代中期後半～後期前半のもたと仮定するならば、T P-8・9が構築され埋没するまでの間、周辺の包含層には、遺構に流れ込む礫石器・レキが存在しなかったと考えれば、これらの遺構の時期は縄文時代中期以前の可能性も考えられる。さらに、T P-8・9は溝状で他のTピットと形態が異なること、縄文時代早期の土器が出土していることも傍証となりうるかもしれない。

周辺の遺跡のTピットの調査事例を比較すると、楕円形のもは杭穴があるものが一般的で、さらに、遺構の深さは1mを超えるものが多い。本遺跡の楕円形のTピットは、杭穴がないものもあり、比較的浅い。これは、遺構の坑底面が位置するT a-d層とその下位の黄灰色粘土層中で湧水があったため、坑底面の精査が不十分であったことは否めない。

2. 土器

土器はⅢ群b類とⅣ群a類が多い、また、Ⅲ群土器は復原個体が複数得られたことや、Ⅳ群土器は小破片が多いことを勘案すると、主たる時期は縄文時代中期後半にしぼり込める。さらに土器型式は、棒状の細めの突起部で、粘土の貼付とこの部分への半截竹管状工具による施文により、立体的で装飾性があること、口縁部も貼付により断面が三角形に肥厚し、器形が曲線的なものが多くことから、萩ヶ岡3式土器が最も多い。Ⅳ群a類は余市式土器で、胎土に粗粒の砂礫を多く含む脆弱である。他には、Ⅰ群の東銅路Ⅳ式、Ⅴ群と考えられる曲線的な沈線文が施された土器、Ⅶ群の擦文土器が数点出土した。また、本地域の特徴の一つ、ガラス状光沢の石英が多量に胎土に含まれる土器は、掲載番号11・17・18・22・34等の破片土器がある（図22～24）。

3. 石器等

石器は、剥片石器では黒曜石製の石鏃、U・Rフレイク、フレイクが多く出土した。礫石器やレキ（自然礫）は、厚真川上流地域の山体部を形成する脆弱な堆積岩系の岩石を、石材とするものが多く、すべてが人為的に持ち込まれたとは考えがたい。また、人為的な使用痕・加工痕と自然作用による石の表面の区分も厳密には困難であった。点数が多いのは砥石と台石・石皿であるが、これらの石材は割

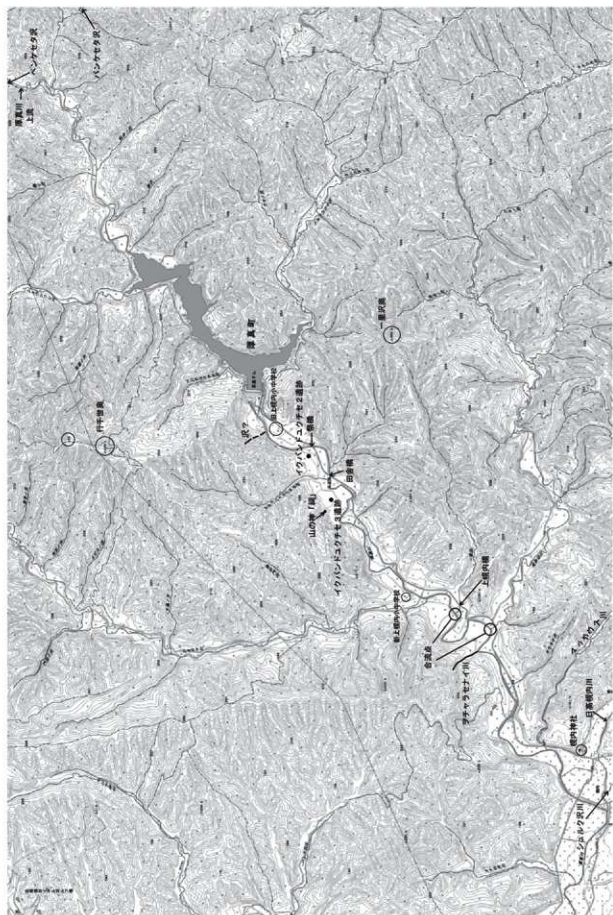


図29 厚真川上流域
 国土院電子地形図25000 (標内・厚真川上流) を縮小して合成・加筆

れやすく破片化しやすい特徴も要因の一つであろう。また、石材が限定される磨製石斧や、火成岩系の閃緑岩や花崗岩、石製品の石材であるタルク岩等は、選択して遺跡に持ち込まれた可能性が考えられる。堆積岩系の脆い岩石を利用した石器が多数出土することは、石材の入手が容易な遺跡の立地環境、すなわち、厚真川上流地域の特徴の一つである。

4. 地名「イクバンドユクチセ」について

本遺跡名の「イクバンドユクチセ」はアイヌ語由来で、「現在の地形図」(図1・図29)みられる。この名称がいつ頃から使用されたのか、その経緯について過去の地形図や記録から検討する。また、関連が考えられる「チセ」の名称がある地名も記しておく。

新旧の地形図を比較する時、図上での目印や計測の基点としたのは、厚真川が大きくS字に蛇行する付近の、鬼岸辺川や一里沢との合流点、三等三角点「行千世奥」と「一里沢奥」がある山頂部である(II章1節)。

『戊午 東部 安都麻志 全』 松浦武四郎 安政5(1858)年

『戊午 東西蝦夷山川地理取調日誌 中』昭和60(1985)年 高倉新一郎校訂 秋葉実解説

松浦武四郎は、トンニカ村(現在の富里)の記述の後半の部分に「トンニカより山越えてニワンへ行候得共、(略)然し是はさし置、川順を志るし置に」とあり、ツイカルナイ(老軽舞 現在の東和)から上流部の地名は聞き書きである。

「イクバンドユクチセ」の名称はなく、絵図にもみられない。「チセ」の名称では、ショロマ川の支流に「マタヤツチセ」と「ベンケヤツチセ」の記述がある(手控では「ヤツチセ」との記載で、前者をさすと推測される)。

「マタヤツチセ」は、木皮で作られた冬期間の狩猟小屋で、「ベンケヤツチセ」は、上流にある木皮で作られた狩猟小屋である。これら小屋の地理的な位置関係は、記載の仕方からショロマ川の支流で「マタヤツチセ」は厚真川との合流点から「七八丁(760~870m)」進んだ場所で、その奥にショロマの滝(ソウ)さらに山奥へ「ベンケヤツチセ」がある。「マタ」は「冬」、「ベンケ」は「上流部」の意味で、ショロマ川沿いで下流部の「マタヤツチセ」、上流部の「ベンケヤツチセ」と理解できる。また、「ベンケヤツチセ」と発音が類似するものに、現在の厚真ダムに流れる「ベンケユクチセ沢」があるが、川筋が異なり別と判断される。

図30 「栗標」(夕張岳第十六號)・「楓山」(夕張岳第十五號) 北海道假製五万分一図

明治29(1896)年 製版 陸軍陸地測量部

イクバンドユクチセの名称はみられないが、無名の沢として図化されている。「チセ」の名称は「ユクチセ」という沢がみられ、現在の「ベンケユクチセ沢」の位置に記載されている。

地形図の精度は、現在のものと比べて劣るが、厚真川と支流の合流点の位置は概ね正しい。地形図上の山間部の沢の線形は、山地の等高線に整合させて図化されるので、これの精度に影響される。すなわち、本図は、本流の厚真川と支流との合流点は概ね正しいが、山間部の沢の流れは正確でない。また、現在のイクバンドユクチセ沢と現ベンケユクチセ沢(ユクチセ)の間の厚真川の両岸に二本ずつ無名の沢がある。

図30に記載のある河川名を下流部から列挙する。なお、(丸かつこ)は現在の地形図での名称で、*狩体表記*は江戸時代の松浦武四郎の記録にないものである。厚真川(厚真川 旧字体)、シヨルマ(シ

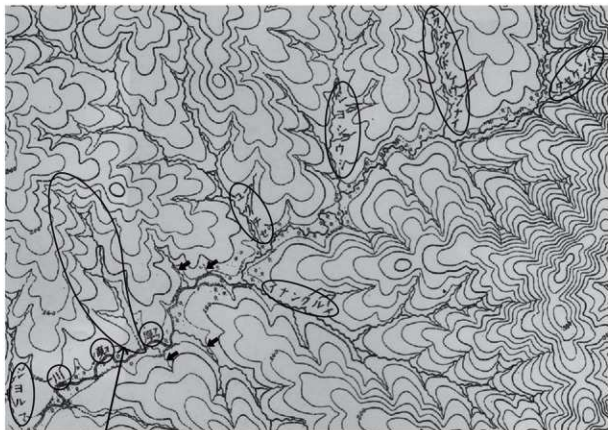


図30 「累標」(夕張岳第十六號)

イクバンドユクセセ沢

北海道假製五万分一図(明治29年度製版)に加筆

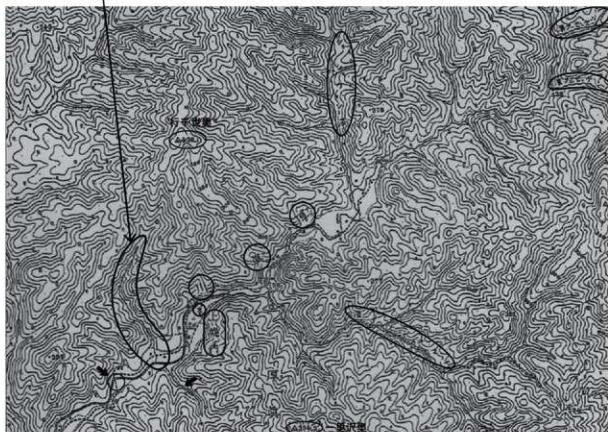


図31 「穂別」(夕張嶽十六號)

五万分一地形図(大正8年測量)に加筆

ヨロマ川)、メルクンナイ (メルクンナイ沢)、ユクチセ (ベンケユクチセ沢)、ショウシウシ (ショウシウシ川)、エタンパウンドレブクンナイ (標の沢)、バンケセタ (バンケセタ沢) である。図は掲載していないが、この上流部 (「楓山」夕張岳第十五號) には、バンケシユマルブ子、ベンケシユマルブ子、イサオフベツがある。

当時、陸軍測量部が、松浦武四郎が記した河川の名称を、現地にて特定し測量したとは考えがたく、これらの名称は、現地で聞き込みする等をして定めたと推測される。

図31 「穂別」(夕張嶽十六號) 五万分一地形図

大正8(1919)年 測図 大日本帝国陸地測量部

イクバンドユクチセの名称はなく、沢は曲線的な一本の線形で図化されている。「チセ」名称がついた地名はない。

本流の厚真川と支流の合流点の位置は正しく、本図の精度は概ね現在(図29)と同じである。図化された曲線的な沢は、現イクバンドユクチセ沢の二つの流れのうち、南側(下流部)の方の流れと概ね一致する。山頂部は「行千世奥」は標高436.1m、「一里沢奥」は標高394.3mである。

図31にみられる河川名を列記する。(丸かっこ)は現在の地形図での名称である。厚真川(厚真川旧字体)、メルクンナイ澤(メルクンナイ沢)、ショウシウシ澤、(ショウシウシ川)、バンケセタ澤(バンケセタ沢)、ベンケセタ澤(ベンケセタ沢)である。本地形図の範囲に記載はあるが、報告書掲載図で示せなかったものに、オキシベ川(鬼岸辺川 カタカナ表記)、一里澤(一里沢)の名称がある。また、下流部の「早来」(札幌四號)、上流部「紅葉山」(夕張嶽十五號)では河川名はみられない。

これらのうち、現河川名で厚真川、メルクンナイ沢、ショウシウシ川、バンケセタ沢は、明治29年の地形図(図30)と位置の違いはないが、「ユクチセ」(現ベンケユクチセ沢)は名称もなく図化もされていない。

『厚真村史』 厚真村 昭和31(1956)年

「第五章 厚真村のアイヌ語地名解」に、北海道大学 知里真志保博士による解釈が記載されている。記載順序は下流部から上流部への順で、「チセ」は三例記載があるが、地名が示す場所を記載した地図等はない。

原名 ユクチセ = 「イ・ウク・チセ」で「それを・とる・家」で鹿をとるための狩小屋(鹿待小屋)。

「エタパウンユクチセ」 = 「こちら側にある・鹿待小屋」の義

本遺跡の名称に最も発音が近いことや、他に類似する名称は認められないことから、これが「イクバンドユクチセ沢」の名称と判断される。江戸時代から大正時代まで、名称が記録されることはなかった。上流部の現ベンケユクチセ沢(ユクチセ沢)に対して「こちら側」と考えるのが自然であろう。「ベンケユクチセ」 = 「上流の・鹿待小屋」の義。

下流部の「エタパウンユクチセ」(イクバンドユクチセ)に対して上流にある意であろう。明治時代の地形図(図30)では「ユクチセ」(現在のベンケユクチセ沢の位置)との表記であるが、「ベンケ」が省略されて呼称されることがあったのかもしれない。

図32 「厚真村全圖」 十万分一之図 『厚真村史』掲載図 昭和31(1956)年 村史刊行

本図は、その表記方法や記載情報から、当時の厚真村役場が大正時代の五万分一地形図(図31)を縮小して再編集し作成された地図(図32)と推測される。ゆえに、記載されている河川の名称も同

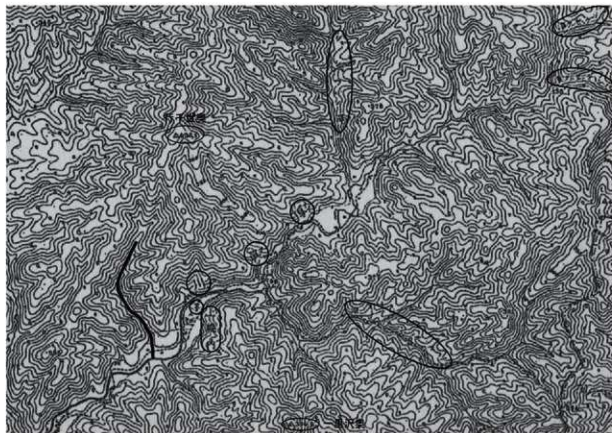


図32 「厚真村全圖」(『厚真村史』掲載図)
 十万分の一圖を2倍に拡大し加筆 昭和31年

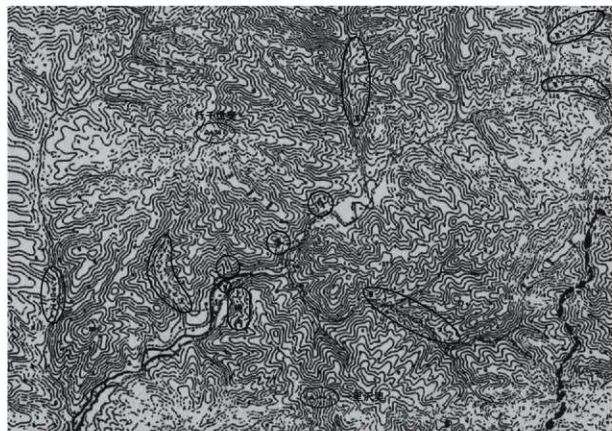


図33 「厚真村に存在する遺跡」(『厚真村古代史』掲載図)
 十万分の一圖を2倍に拡大し加筆 昭和31年

じである。この大正8年測図の地形図は、昭和10(1935)年に修正、昭和19(1944)年に空中写真測量により修正されているが、大きな変更点はない。

図33 「厚真村に存在する遺跡」 十万分一之図

『厚真村古代史—村内に存在する先住民族の遺跡—』掲載図 昭和31(1956)年

本図は先に述べた『厚真村史』に掲載された「厚真村全圖 十万分一之図」を基図(図32)としている。文字が小さく判読しにくい、厚真川上流部の沢に名称が記されている。現在のショロマ川に「ショロマ沢」、イクバンドユクチセ沢に「?タバウン?クチセ沢」と手書きの名称がある。この手書きの名称は、地形図に元から記載されたものではなく、後で書き加えられたと判断される。それは、地形図本来に掲載されている支流の記載は、旧字体の「澤」であるが、追加記載したと思われる部分は、新字体の「沢」を用いている。また、この本文中にも沢の地名についての記述はみられない。

『厚真の旧地名を尋ねて』・『厚真町地名図』 池田 実・亀井喜久太郎 昭和51(1976)年

厚真町地名図：図34 本文掲載図：図35 (38頁掲載図)

イクバンドユクチセは「厚真町地名図」(図34)では現地地形図(図29)と同じ位置(右岸)であるが、本文と本文中の掲載図(図35)は左岸の沢として記載されている。引用すると「ユクチセ沢の対岸にある川。「いなかはし」のすぐかみにあるつり橋の脚柱の近くに南方から流れ込んでいる(略)旧道がこの沢を渡っていた(略)」とあり、さらにユクチセの説明では、「厚真町旧地名図ではイクバンドユクチセ沢となっているが、明治29年5万分1図ではユクチセ、さらに上流にベンケユクチセ沢(略)「いなかはし」の北側に注いでいる川。「佐々木の沢とも呼ぶ(略)」とある。すなわち、右岸の現イクバンドユクチセ沢をユクチセ、対岸である左岸の無名の沢をイクバンドユクチセ沢ではないかと推定している。佐々木の沢とは近くの居住者の名字に由来する。

『続厚真の旧地名を尋ねて』・『厚真町地名図』 池田 実・亀井喜久太郎 昭和53(1978)年

厚真町地名図：図36 本文掲載図：図37 (57・73頁掲載図を合成)

本文、本文掲載図(図37)及び厚真町地名図(図36)では、現地地形図(図29)と同じ位置にイクバンドユクチセの記載がある。引用すると「いなか橋より下流で、北から注いでいる川。いま佐々木の沢と呼んでいる」とあり、厚真村史に記載のある「エタバウン・ユクチセ」のことで「こちら側にある・鹿待小屋」の意味で、こちら側とは、上流の「ユクチセ沢」に対して下流の立地と解したと判断される。また本文中では「ユクチセ」は、現在の地形図(図29)のベンケユクチセ沢とし、「ベンケユクチセ」は、その上流部約300mの小川で暗渠を通る無名の沢(下流部に池がある)と解釈している。

名称や位置が混同されなかった川・沢

江戸年間、松浦武四郎が記した『戊午 東部 安部麻志 全』にある地名のうち、厚真川上流部は現地を訪れず聞き書いたものであり、現地地形図で下流部から沢名を順番に当てはめていくと、右岸はショロマ川、左岸は一里沢の上流部から、沢の数の方が多くなり整合しない。

しかし、厚真川上流部の左岸のメルクンナイ沢、右岸のショウシウシ川の二つは、各時代の記録・地形図で位置も名称も変わっていない。両河川は、厚真川の上流部では特に大きな支流であり、地名解や河川の地形といった特徴から、混同されなかった理由を推測する。

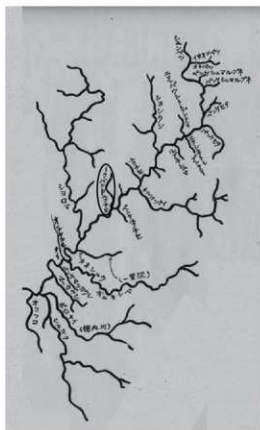


図34 厚真町地名図 (昭和51年)



図35 『厚真の旧地名を尋ねて』
本文掲載図 (昭和51年)

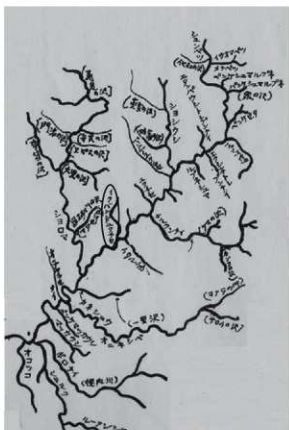


図36 厚真町地名図 (昭和53年)

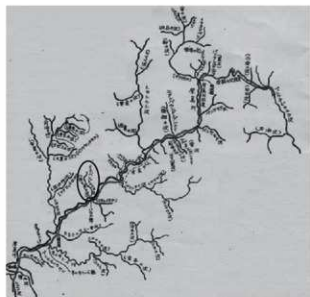


図37 『続厚真の旧地名を尋ねて』
本文掲載図・合成 (昭和53年)

「メルクンナイ沢」

松浦：メルクンナイ；メル（寒気）・クン（氷る）で、寒気で凍りやすい沢

知里：メルクンナイ（ペールコンナイ）；水路を・もつ・沢

メルクンナイ沢は支流が多く、南からの二本の支流は「一里沢奥」の山中に源流部がある、同山の南側には、鬼岸辺川の支流の「冷水の沢」があり、この山からの沢水は比較的冷たいことが特徴なのかもしれない。また、この沢沿いには「メルクンナイ林道」があり、むかわ町穂別方面につながっている。昔からこの沢沿いには山越えの道があり（厚真町教育委員会 2014他）、交通路上重要な河川であったからと考えられる。

「ショウシウシ川」

松浦：シヨシウシ；平元、崩れて山肌がみえている崖

知里：シュシウシナイ；柳の・群生している・沢

地名解は、岩肌がみられる崖や柳の群生とあり、これらは本河川だけにみられる特徴ではない。ショウシウシ川は、流れをはさむ谷が広く、本流の周囲には低地が広くみられ、厚真川上流部にある他の急峻な沢とは、地形的な特徴から区別されてきたからと推測される。

まとめ

イクバンドユクチセ沢は、昭和31(1956)年7月刊行の『厚真村古代史』の掲載地図「厚真村に存在する遺跡」に位置と名称「**エタバウン？クチセ沢**」が記され、アイヌ語地名が解説されたのは、同年9月刊行の『厚真村史』にある「エタバウン・ユクチセ」で、これが「イクバンドユクチセ沢」と考えられる。

現在、厚真川上流部にはカタカナ表記のアイヌ語地名、漢字の和名が混在してみられる。これらの地名は、アイヌ語由来のもの、アイヌ語と和名が付けられどちらかに定まったであろうもの、和名で付けられたものに分けられる。昔から利用されてきた交通路である、メルクンナイ沢等はアイヌ語地名であるが、このような重要な場所以外は、地名が付けられなかった、あるいは、地名が付けられたとしても共通認識する必要が少なかったのかもしれない。

(末光)

表27 イクバンドユクナセ七沢名称対照表

地図・文献		沢の名称	「ナセ」とつく地名	その他の 増形・地名	備考
電子地形図25000 「厚真川上流」	国土地理院 平成26(2014)年 11月18日 調査	イクバンドユクナセ沢	ペンクユクナセ沢	—	高倉新一郎「図1・秋田実 解説」 1985 『戊午 東道頓岡山地理院調査誌 中』
	『改牛 東道 安部峰志 全』 松浦武尚監 安政5 (1858) 年	—	マタヤツナセ ペンケヤツナセ	—	
北道調査第五分一団 「東巻」(夕張郡十六村) 「鶴山」(夕張郡第十五村)	梅澤 陸地調査部 明治29 (1896) 年 調査	—	ユクナセ	イクバンドユクナセ沢の 上流部右岸無名名記；1本 上流部左岸；無名記2本	厚真川上流部 イクバンドユクナセ七沢遺跡 よりも上流部に、 地名；上巻内・地図記号；学校 オニキネンベ川沿いに 地名；巻内 第五章 「厚真村のアイヌ語地名解」 北海道大学 加藤真志保
	大日本帝国 陸地調査部 大正8 (1919) 年 調査	曲線的 一本の沢れ	—	厚真川 オニキネンベ川 メルクンナイ川 シヨウクワン川 シヨウクワン川 ペンケセケガサ・ペンケセケガサ	
『厚真村史』	厚真村 昭和31 (1956) 年	—	ユクナセ エタハウンクナセ ペンケユクナセ	—	「厚真村のアイヌ語地名解」 北海道大学 加藤真志保
『厚真村全図』 十万人一之図 『厚真村史』掲載図	厚真村 昭和31 (1956) 年	曲線的 一本の沢れ	—	厚真川 オニキネンベ川 一冊澤 メルクンナイ川 シヨウクワン川 ペンケセケガサ・ペンケセケガサ	五万分之一地形図 「鶴山」(夕張郡十六村) 他 を縮小編集して作成した図 曲線の更新はなし
『厚真村内に存在する遺跡』図 10万5千の 『厚真村史』 -村内に存在する 先住民族の遺跡- 巻末掲載	厚真村 昭和31 (1956) 年	曲線的 一本の沢れ	—	厚真川 オニキネンベ川 一冊澤 メルクンナイ川 シヨウクワン川 ペンケセケガサ・ペンケセケガサ	沢名が手書きで加筆 されている。沢字の使い分け 地図の情報；「澤」 手書きの情報；「沢」
『厚真の旧地名を尋ねて』	池田 実 亀井善久太郎 昭和53(1978)年 4月11日	曲線的 一本の沢れ (名称はユクナセ)	イクバンウンクナセ沢 = イクバンドユクナセ沢	厚真川 オニキネンベ川 一冊澤 メルクンナイ川 シヨウクワン川 ペンケセケガサ・ペンケセケガサ	沢名が手書きで加筆 されている。沢字の使い分け 地図の情報；「澤」 手書きの情報；「沢」
『厚真町地名図』	池田 実 亀井善久太郎 昭和53(1978)年 4月11日	曲線的 一本の沢れ	イクバンドユクナセ (佐々木の沢)	厚真川 オニキネンベ川 一冊澤 メルクンナイ川 シヨウクワン川 ペンケセケガサ・ペンケセケガサ	沢名が手書きで加筆 されている。沢字の使い分け 地図の情報；「澤」 手書きの情報；「沢」
『厚真町地名図』	池田 実 亀井善久太郎 昭和53(1978)年 4月11日	曲線的 一本の沢れ	イクバンドユクナセ (佐々木の沢)	厚真川 オニキネンベ川 一冊澤 メルクンナイ川 シヨウクワン川 ペンケセケガサ・ペンケセケガサ	沢名が手書きで加筆 されている。沢字の使い分け 地図の情報；「澤」 手書きの情報；「沢」
『厚真町地名図』	池田 実 亀井善久太郎 昭和53(1978)年 4月11日	曲線的 一本の沢れ	イクバンドユクナセ (佐々木の沢)	厚真川 オニキネンベ川 一冊澤 メルクンナイ川 シヨウクワン川 ペンケセケガサ・ペンケセケガサ	沢名が手書きで加筆 されている。沢字の使い分け 地図の情報；「澤」 手書きの情報；「沢」

写 真 图 版



調査前の状況（東から）



調査状況（北東から）



調査完了状況 1 (北西から)



調査完了状況 2 (北東から)



P-1 土層断面 (北から)



P-1 完掘状況 (北から)



P-2 土層断面 (北から)



P-2 完掘状況 (北西から)



TP-1 土層断面 (東から)



TP-2 土層断面 (南西から)



TP-2 完掘状況 (南西から)



TP-2 礫出土状況 (南西から)



TP-3 土層断面 (北西から)



TP-3 確認状況 (北西から)



TP-4 土層断面 (南から)



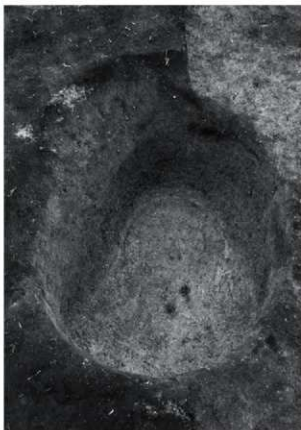
TP-4 杭穴確認状況 (東から)



TP-5 土層断面 (北から)



TP-3 完掘状況 (北から)



TP-4 完掘状況 (北から)



TP-6 土層断面 (南から)



TP-6 完掘状況 (南西から)



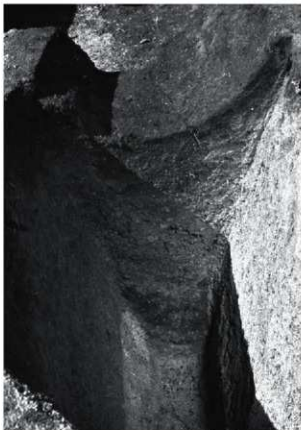
TP-5 完掘状況 (北から)



TP-7 土層断面 (南から)



TP-7 完掘状況 (北から)



TP-8土層断面 (南東から)



TP-8完掘状況 (東から)



TP-9土層断面 (東から)



TP-9完掘状況 (東から)



TP-10土層断面 (北から)



TP-10完掘状況 (北から)



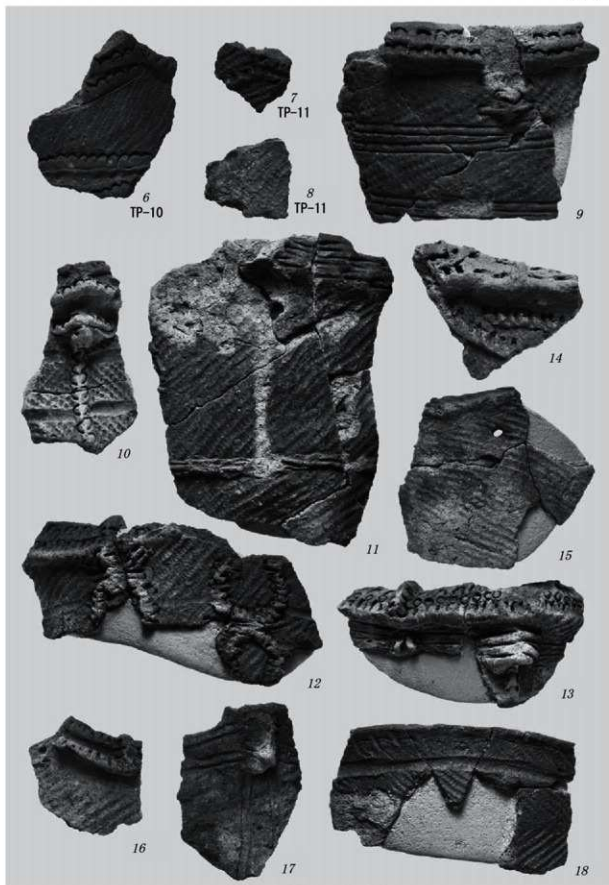
TP-11土層断面 (北から)



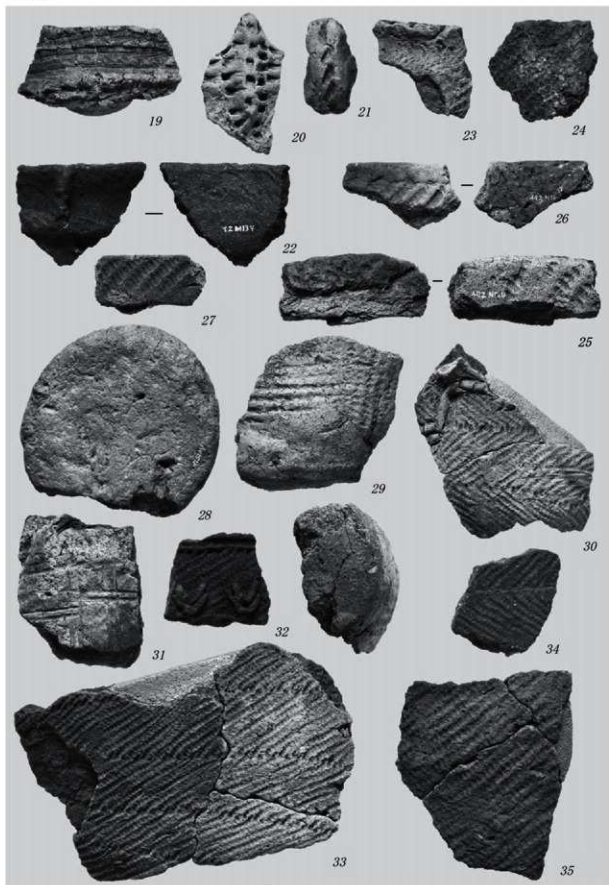
TP-11完掘状況 (北から)



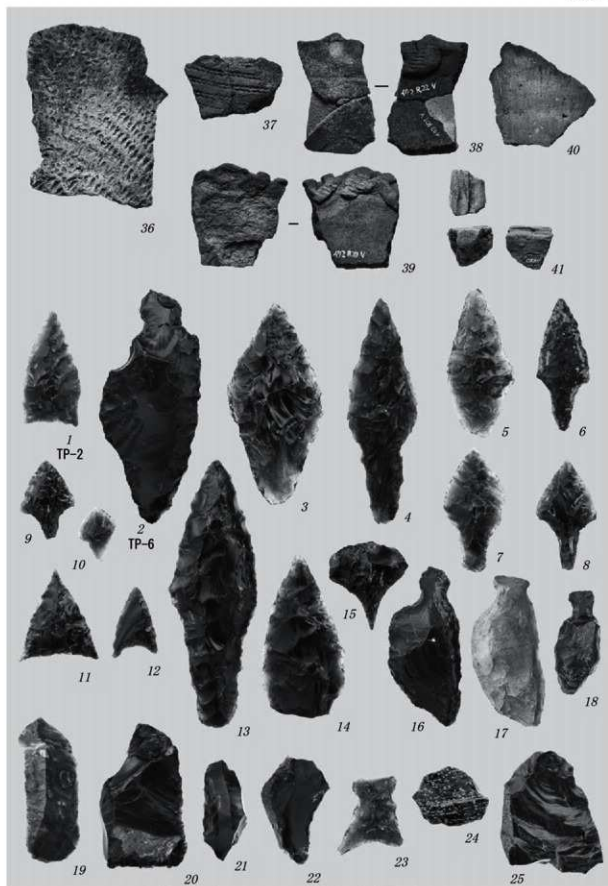
包含層出土復原土器・遺構出土破片土器



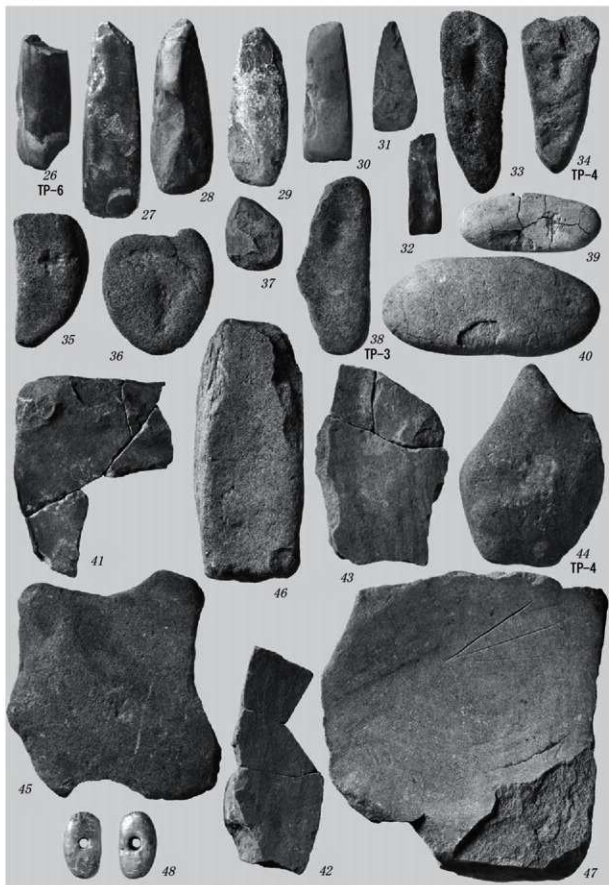
遺構・包含層出土破片土器



包含層出土破片土器(1)



包含層出土破片土器 (2) 遺構・包含層出土剝片石器



遺構・包含層出土礫石器・石製品

引用参考文献

論文・書籍等

- 池田実・亀井喜久太郎 1976 『厚真の旧地名を尋ねて』
池田実・亀井喜久太郎 1978 『続厚真の旧地名を尋ねて』
小山正忠・竹原秀雄 1967 『新版 標準土色帖』日本色研事業株式会社
松浦武四郎 秋葉実 解説 高倉新一郎校訂
1985 『戊午 東部 安都麻志 全』『戊午 東西蝦夷山川地理取調日誌 中』 北海道出版企画センター

団体組織刊行物

- 厚真町 1986 『厚真町史』
厚真町 1998 『増補 厚真町史』
厚真町観内自治会 1997 『開基百年 観内のあゆみ』
厚真村 1956 『厚真村史』
厚真村教育委員会・厚真村郷土研究会 1956 『厚真村古代史 一村内に所在する先住民の遺跡―』
ペドロジスト懇談会 1984 『土壌調査ハンドブック』博友社
北海道考古学会 2013 『2013年度 北海道考古学会 遺跡調査報告会資料集』
北海道考古学会 2014 『2014年度 北海道考古学会 遺跡調査報告会資料集』

埋蔵文化財発掘調査報告書

厚真町教育委員会

厚幌ダム建設事業

- 厚真町教育委員会 2004 『厚幌 1 遺跡』-厚幌ダム建設に係わる一般道切替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
厚真町教育委員会 2006 『厚真町 上幌内モイ遺跡 (1)』厚幌ダム建設事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書 1
厚真町教育委員会 2007 『厚真町 上幌内モイ遺跡 (2)』厚幌ダム建設事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書 2
厚真町教育委員会 2009 『上幌内モイ遺跡 (3)』厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3
厚真町教育委員会 2011 『オニキシベ 2 遺跡』 厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4
厚真町教育委員会 2013 『ヲチャラセナイチャシ跡・ヲチャラセナイ遺跡』
厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5
厚真町教育委員会 2013 『オニキシベ 5 遺跡』厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6
厚真町教育委員会 2014 『厚幌 1 遺跡 (3)』厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7
厚真町教育委員会 2014 『オニキシベ 4 遺跡』厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 8
厚真町教育委員会 2014 『ヲチャラセナイ遺跡』厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 9
厚真町教育委員会 2014 『オニキシベ 6 遺跡』厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 10
厚真町教育委員会 2014 『シロマ 3 遺跡』厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 11

勇払東部 (二期) 地区 厚幌導水管事業

- 厚真町教育委員会 2009 『ニタツプナイ遺跡 (1)』
国営土地改良事業勇払東部 (二期) 地区 厚幌導水路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1
厚真町教育委員会 2010 『厚幌 1 遺跡 (2) 幌内 7 遺跡 (1)』
国営土地改良事業勇払東部 (二期) 地区 厚幌導水路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2
厚真町教育委員会 2010 『幌内 5 遺跡 (1) 富里 2 遺跡 ニタツプナイ遺跡 (2)』
国営土地改良事業勇払東部 (二期) 地区 厚幌導水路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3

その他の事業

- 厚真町教育委員会 2001 『鯉沼 2 遺跡』鯉沼農地造成工事・土砂採取工事用地内埋蔵文化財工事立会報告書
厚真町教育委員会 2001 『豊川 1 遺跡』ノーザンファームトレーニングコース (坂路馬場) 造成工事立会報告書
厚真町教育委員会 2013 『ワイカルマイ遺跡 (1)』
道道上幌内早来停車場線特改 1 種工事 (道州) 事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1

苫小牧市埋蔵文化財調査センター・苫小牧市教育委員会

苫小牧市埋蔵文化財調査センター

1998 『美沢東遺跡群』道道静川美沢線道路改良工事に伴う美沢東4・5・6遺跡発掘調査報告書

(財)・(公財) 北海道埋蔵文化財センター刊行物

(財) 北海道埋蔵文化財センター 1994 『遺跡が語る北海道の歴史』15周年記念誌

(財) 北海道埋蔵文化財センター 2004 『遺跡が語る北海道の歴史』25周年記念誌

(公財) 北海道埋蔵文化財センター 2013 『調査年報25 平成24年度』

(公財) 北海道埋蔵文化財センター 2014 『調査年報26 平成25年度』

報告書抄録

ふりがな	あつまちよう いくばんどゆくちせ 2 いせき							
書名	厚真町 イクバンドユクチセ2遺跡							
副書名	厚観ダム建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 (北埋調報)							
シリーズ番号	第319集							
編著者名	村田 大・末光正卓・奥山さとみ							
編集機関	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1 Tn011-386-3231							
発行年月日	西暦2015年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いくばんどゆくちせ2 イクバンドユクチセ2 いせき 遺跡	ほつがく+どう 北海道 ゆうふつでん 勇払郡 あつまちよう 厚真町 あざはらない 字 幌内 61-333カ	1581	J-13 -119	P-15 グリッド様 42° 47' 16.2"	142° 01' 36.5"	20130821 ～ 20131031	1,174㎡	厚観ダム建設 事業に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
イクバンドユクチセ2 遺跡	散布地	縄文時代 中期・後期	土坑・Tピット	土器・石器等		厚真川流域で 最上流に位置する遺跡		
要約	<p>イクバンドユクチセ2遺跡は、石狩低地帯の南東側、厚真川の上流部に位置する。山間部を流れる厚真川の右岸、標高85m付近の高位の河岸段丘に立地する。本書は平成24(2013)年度調査の報告である。現在、厚真川水系の遺跡では最も上流部に位置する。</p> <p>遺跡の主たる時期は、縄文時代中期後半と後期前半で、遺構は土坑、Tピットを確認した。</p> <p>遺物は土器、石器等が出土し、その他に、縄文時代早期・晩期と、弥文土器も少量出土した。</p> <p>割片石器は黒曜石製のものが多く、タルク岩製の玉も出土した。礎石器・礎は多量に出土し、これらの多くが遺跡周囲の山体部を形成する、脆弱な堆積岩が用いられている。</p>							

(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第319集

厚真町 イクバンドユクチセ2遺跡

— 厚幌ダム建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成27(2015)年3月25日

編集・発行 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1
TEL 011(386)3231 FAX 011(386)3238
[URL] <http://www.domaibun.or.jp/>
[E-mail] mail@domaibun.or.jp

印刷 株式会社 総北海 札幌支社
〒065-0021 札幌市東区北21条東1丁目4-6
TEL 011(731)9500 FAX 011(731)9515